

研究ノート

西米良村の山で働く人々と狩りの記録

本田 佳奈

はじめに

宮崎県児湯郡西米良村は九州山地の山深い村である。明治22年までは西都市東米良とともに一つの村を形成し、古くから米良荘の名で知られている。現在の人口は650人。高千穂、椎葉村、五家荘とともに九州山地の秘境の一つに数えられる。米良の山は深い。村の総面積のおよそ95%を山林が占める。耕地はわずかに0.5%あまり。村の北側には米良三山と称される市房山(1722m)、石堂山(1547m)、天包山(1188m)がそびえ、四方を千メートル級の山に囲まれている。この西米良村において地名、山林のこと、狩猟に関する聞き取りをおこなった。

I 山の暮らしの聞き取り

(1) 尾股での子供時代(土居栄太郎さん)

西南戦争の騒乱の後、宮崎県の旧共有林と個人所有林は大きく国有林へと囲い込まれた時期があった。これに対する県民の反発は激しく、明治20～40年代、国有林払い下げ運動が起こった。このとき西米良村も111.6haの払い下げを受けた。現在の国有林は4.19平方kmとごくわずかである。現在も国有林55%を占める宮崎県にあって稀なケースといえよう。さらに、明治維新の際、領主菊池氏は全山林を村民へ均等に配分するという政策をとったという(西米良村1973:578)。しかしこれら村民の個人所有林は村外の林産業の会社に次第に買収されていく。村外所有者の所有面積は昭和63年当時で10138ha。県下でもっとも多い。二番目の東郷町が5526haとなっているので、その大きさがよくわかる(全国農業構造改善協会1989:30)。

村外山林所有者の活動がとりわけ顕著だったのが、尾股山林だった(地図1)。大字村所の奥山である。尾股

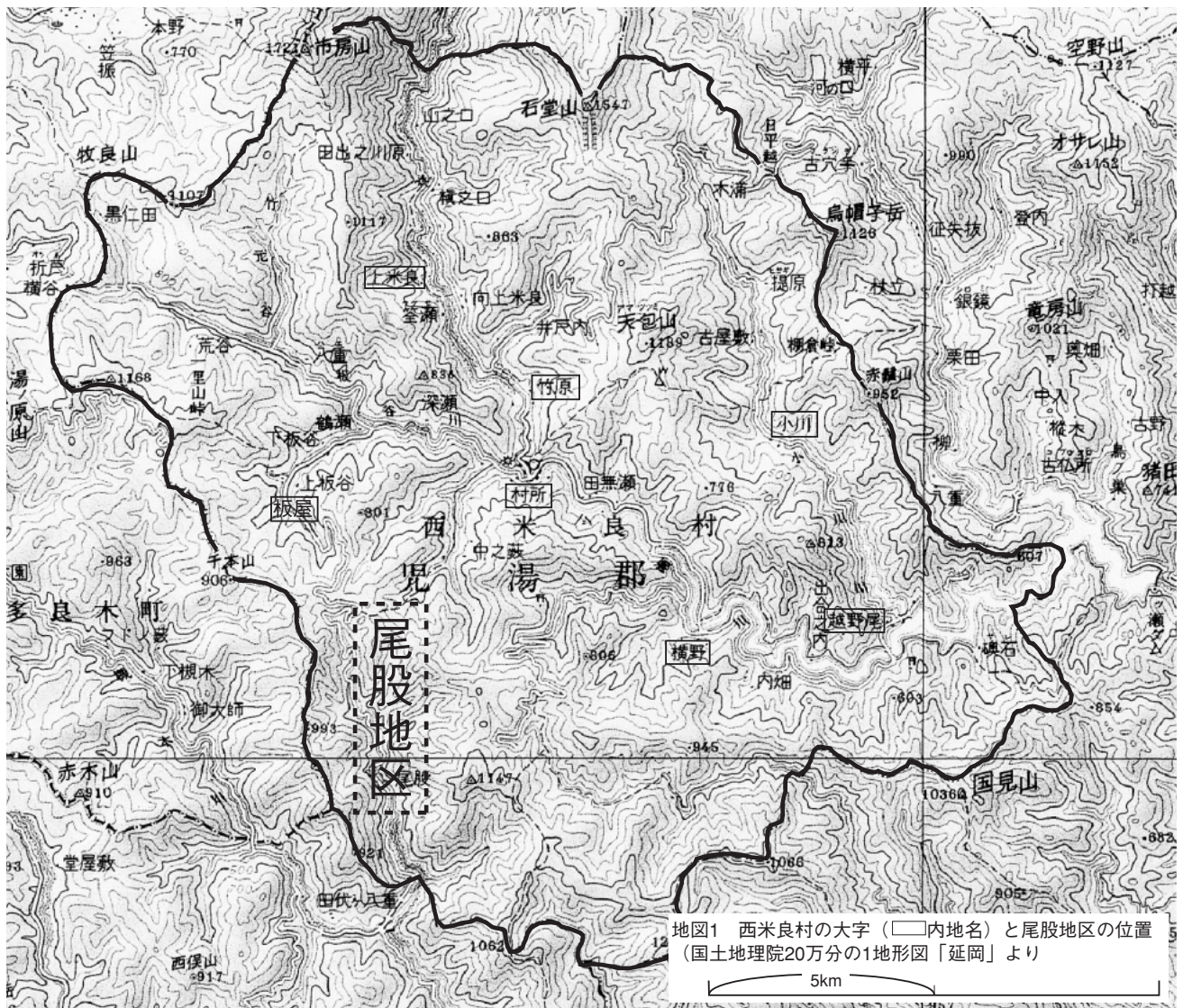
山林は明治23年の時点で鹿児島県の長崎竹八郎の所有となっている。明治から大正にかけて尾股でどのような山林経営が行われていたのかはよく分からない。しかし昭和10年代初頭より竹内義男率いる竹内林業は積極的な木炭経営を展開した。竹内氏は和歌山県出身で、隣の椎葉村の永見商店の大ソマ頭兼エージェントであった。永見商店の閉店を契機に尾股山林の大規模な山林経営に乗り出したのである。

折りしも昭和12年から椎葉村を抜き、西米良村は県下最大の木炭出荷量を記録した。村所地区だけでも105カ所の白炭窯があった(竹内・高倉・上野1965:193、205、231)。竹内林業は尾股から人吉方面へ木炭を出荷するため、難所の尾股峠を開削した。これによってトラックによる搬出が可能となった。しかし大阪資本である清水産業との山林買収合戦に破れ、終戦後まもなく尾股山林を撤退することとなった。清水産業の山となった尾股はさらに人口が増え、発展した。清水産業事務所の所長だった北里留氏は昭和26年より38年まで村会議員を務めた。しかし昭和30年代になると徐々に尾股の人口が減り始める。33年には75世帯320人だったのが37年には38世帯138人まで減少した(西米良村1973:568-570)。

現在尾股は再び無人の山となっている。唯一、清水産業の事務所が一軒残されている。竹内林業や清水産業のもとで働いた出稼ぎの人々も村外・県外へと離散している。かつての尾股の暮らしを知る人はほとんどいない。そのようななかで、少年時代を尾股で過ごした土居栄太郎氏(昭和9年生)に話を伺うことができた。聞き取りには上米良安芳氏にも同席いただいた。

① ルーツは四国

土居さんの両親は四国の出身である。父は愛媛カミウケの上野穴郡ナに生まれた。農家の長男だった。蒙古馬(いわゆる日本種の小型労働馬)の買い付けのため、大分県に



地図1 西米良村の大字 (□内地名) と尾股地区の位置 (国土地理院20万分の1地形図「延岡」より)

渡った。そのまま福岡県飯塚の炭鉱で働き、脚気にかかった。体に良い、水の良い土地を探して汽車に乗り、方々旅をした。そして東米良村の銀鏡に辿り着いた…というのが土居さんの知る父の経歴である。土居さんの母は高知県長岡郡の出身。母方の祖父母は西米良村の隣り、南郷村の土川に移り住みカジ(楮)やミツマタを扱う仕事をしていた。土居さんも土川の檜葉生まれである。やがて一家は銀鏡、尾股へと転居した。土居さんが10歳の頃、銀鏡からはるばると遠い尾股まで家族で歩いていったという。

②働く男たち

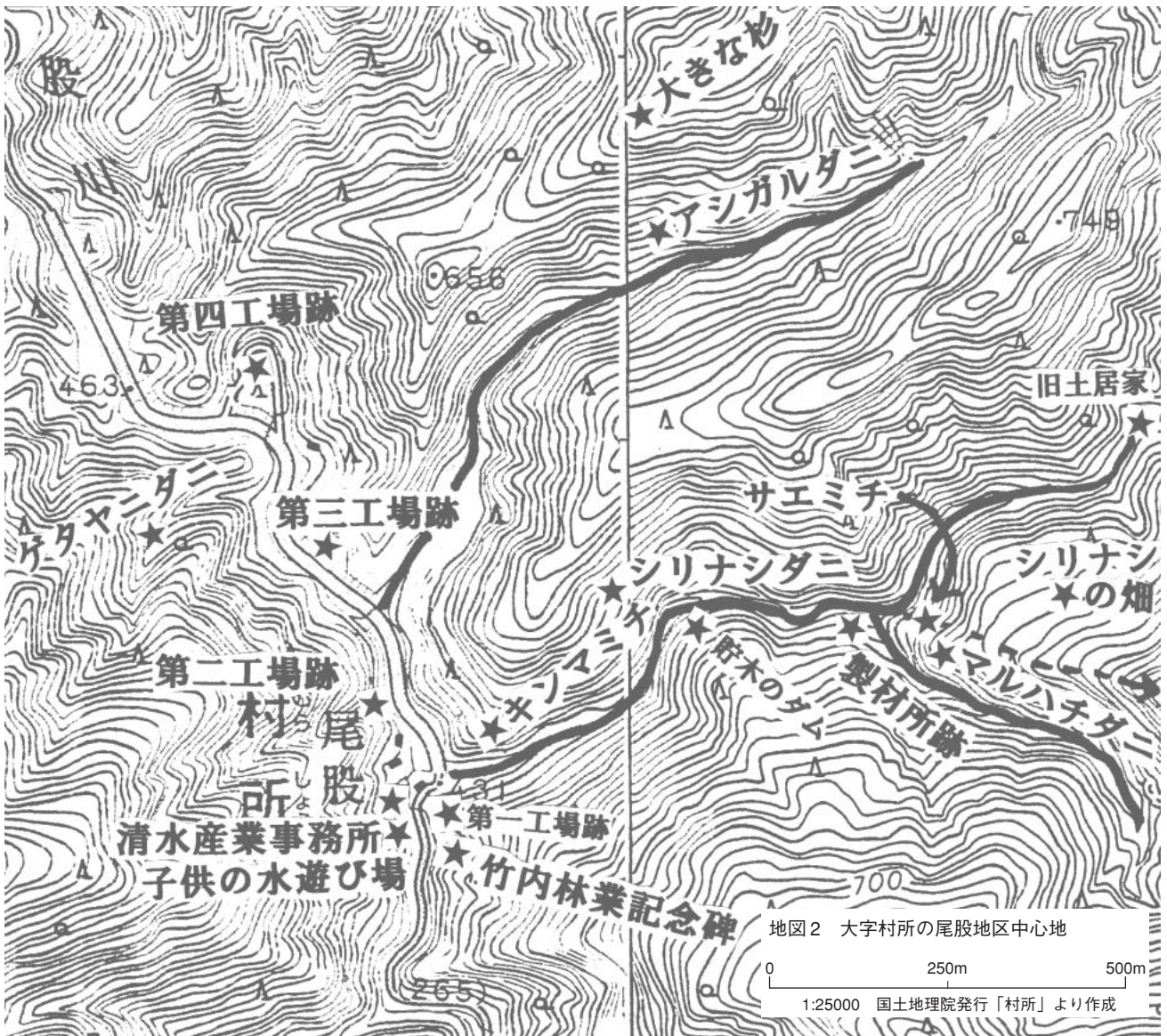
尾股に住む人々は村外・県外から集まっていたが、熊本県、とりわけ球磨郡出身者が多かったという。今は熊本県湯前村に事務所を置いている清水産業の基盤が球磨郡だったためである。土居家が移住した頃はちょうど尾股の利権が竹内林業から清水産業へと移る過渡

期であった。

土居「戦国時代みたいなもんですよな。最初が竹内さん。竹内さんが退いたあとその子分たち(焼子たち)が退く。次が清水産業。それからどうにもならず清水さんが山を小売したわけ。野口さんとか、他は誰が買ったは知らないけど、個人請負の人たちもたくさん山に入とったからねえ。最後の時代は松下さん。この辺りの山を持っているからこの辺のことは一番詳しいじゃろうなあ」

—お父さんはどんな仕事をしていましたか？

土居「用材出しをしよったですね。鳴松センドウっちゅう人についてた。センドウっちゅうのは親方さん。伐木、材出し、キンマ、製材所、いろんな組が何組も、何班もあって、配下もずっと分かれてある。それぞれの組の親方さんをセンドウという。材出しは鳴松センドウと銀鏡センドウっちゅう人がいた。この人たちは大センドウ。元締め。鳴松さんは息子が鳴松林業を今



でもやっている。

あの頃は製材所が3カ所あった。第一工場がシリナシの出口、今の清水産業の事務所の川向かい。ちょっと平たいところ。第二は場所だけ開いてあったけど、製材はしてなかった。アスカリ谷よりちょっと下の川端(清流橋より100mほど上流)。実際に行けばすぐここ、ってわかるけれど、地図ではなかなか……第三工場はここ(ゲタヤニ谷の向かい)』

——ゲタヤニ谷という名前は聞いたことありますか？

土居「いや……(ちょっと考えて)聞いたことはないですね。第四工場はツプロ谷の出口あたり。アスカリ谷は猟師が「明日狩ろう」ちゅうてアスカリ谷になったって聞いた(地図にはアシガル谷と表記)。山は猟師が勝手に名前つけるから。マブシを作るために。アスカリは大きい。ツプロはちょっと小さい。事務所の上の方にあった」

——三カ所の製材所めがけて伐木された材が集まってきたんですね。

土居「あの頃は、どこもかしこもキンマがついとった。今みたいな架線(ワイヤー)はない。ないわねえ、ナベ・カネ全部(供出で)出しよった時代じゃから。カネ(アルマイト)の弁当箱持って行ったらやかましく言われた時代。今じゃ考えられんよ。ねえ。最後の方は、材が減って、工場も一カ所だけにしてしまっ」

——(地図の尾股地区南のはじを示し)岡村さんが、このあたりに竹内林業以前の組が作ったらしいハコイデがあったことを覚えてあるんですが、土居さんがご存知ですか？

土居「ハコイデ……。いや、知らん。こっちの方は、随分あとになってから猟で行ったけど、わからない。シュラやダムならあったですね、シリナシ谷の真ん中くらい。堰を切って、ダム作って材を飛ばしよったで

すよね、川流しして。貯木場ですよ。材を水に漬けてな。そこにマダラ（魚）がいっぱいできるわ。それ、見るのを楽しみにしてた。マダラ見てたらシュラ張ったところからドーンと木を並べて、そしたら木が飛ぶですわ。淵に飛び込んでくるからバーンと自分も水を被ってな。うわ〜っ！て（笑）

——工場までの運搬はすべてキンマ？ 牛や馬を使う人はいましたか？

上米良「あのころ尾股にはおらんかったな」

土居「牛馬おったら食べるもんな（笑）。雑木は牛が出しきらん。まずできない。重いし場所も悪いから動かせない。最近では松を牛で出す人はあったけど、雑木はとてもじゃないが……」

上米良「たまに使う人があってもそれは戦後の話じゃな」

土居「製材所からは板屋の方へトラックで出しよった。トラックが載っても平気な大きな丸太の橋を渡してあった。台風があって橋が壊れたときは、お父さんたちは板屋で橋直し。何カ月も帰って来なかった。家を借りて飯場を作って。あの頃は台風が多かったから。そしたら山の仕事はすべてストップ。橋が壊れてしまっではどうもならない」

——土居さんの家はどの辺りに？

土居「うちはシリナシ谷。（地図をたどりながら）この辺り。谷のちょっと平たいところに2、3軒家があった。今は道路になっるとる平たいところに3軒。向かいにも3軒」

——だいぶ学校から遠いんですね。どれくらい時間がかかりましたか？

土居「いや、一時間もかからんよ。（シリナシ谷には）昔はふかーい淵があったが、今は川全体があがって砂原になってしもうて。山の立ち木、もうないでしょ？ 昔は、おたくのような余所の人 cameたらびっくりするような暗ーいところ。段々切ってくから明るくなった。こんな大木（両手を大きく広げて）、ずーっと、立っただすもん。原始林のごと。それで仕事に入ってたわけですから。原始林のようです」

——それまでいた銀鏡とは違うとなあって思いましたか？

土居「そりゃ思うですよ。木にもコケが生えているような。銀鏡じゃ見えないようなね。こうやって淵を見ると（覗き込むように下を向くそぶり）何か出て来っかなあというような、怖かったですわ。大蛇がおると

かいう謂れの淵が多かったですからね。だから川で遊ぶのは学校の側の川や製材所（第一工場）のちょっと下のあたり。ここに集まって泳いだりした。みんな、一年生から上まで一緒ですわ。そろそろそろそろ、仲良し。兄弟のように仲良くしよった。女の子も男の子も一緒に。怖い淵はやっぱり行かんですよ。今は……もう何年か前行ったけど、怖そうなどこなかったけど」

——シリナシ谷のさらに奥は行きましたか？

土居「いや。行かない。畑があって、そこは名前なかったけど、尾根道はサエ道っていいよった。縄瀬のサエに出る道。このあたり一面は豆やらの畑。ここ（シリナシ谷住民）あたりみんなの。共同っちゅうわけでもないけど、それぞれの畑。終戦後、ヒエ、アワ、サツマイモ、キビを作った。最初は焼いて焼畑して。（木がないので）だからこころへんは明るかった。誰か毎日ここに来ていた」

——シリナシ谷は途中で右に分かれる谷がありますが、それは名前がありましたか？

土居「マルハチ谷っていったかな？」

——そういえば、岡村さんがここにマルハチ製材という製材所があったと言っていましたか？

土井「それは相当前ですよ。あたしたちが住み始めたときは、家の近くに工場跡があって、いわゆるセイタが積み重なって、腐れてナバが生えてた。シリナシ谷もわたしたちが一番先に入ったわけじゃないですから。何年か前に家も段々に造ってあったから。銀鏡センドウもここにおった。マルハチ製材はあたしたちより前の時代のことです。岡村君の家は第二工場の下です。鳴松センドウも岡村君とこの横におった。……今あなたに言われて岡村君思い出したわ（笑）」

——父親の手伝いをしたことは？

土井「いや、材出して子供が手伝うことは何もない。木炭焼きのときは手伝ったけど。子供たちはお母さんの農作業の手伝いをしてた。背中に兄弟かろわされてたよ。みんなどこも妹や弟、くくりつけられて。可哀そうに2年か3年生くらいで、背中の子の足を引きずるようにして。わたしたちも、ようションベンかけられよったもん。今のようにオシメないですからね。背中ゾロゾロ〜っ温ったかくなかったと思っと思ったら……（笑）。うちは4人兄弟だった」

③働く女たち

土井「その頃の人にはイッシュョケンメイ、働いたよ。生きるために。戦争前後はね」

上米良「どこでもそうじゃったな」

土井「ああ。女の人は兵隊で旦那さん取られておらんから、普通なら行かないような山の奥まで行って。一生懸命しよったなあ。寂しいような山で。子供育てるために。人気のないようなところで。食べることが容易じゃなかったから。お金はあっても、品しながないとやから。岡村くんともそうだったですよ。お父さんはまだ（戦地から）戻ってこんで、子供ばかりお母さんの周りにいた」

④食べ物には本当に苦勞した

——尾股にはお店はありましたか？

土居「店はない。配給所が事務所にあった。その前は、月初めに村所まで尾股峠越えてみんなで行った。衣料切符で交換したものをオンブして帰る。道路（265号線）が台風でズブズブになったときは、事務所の向かい側の山道で縄瀬に出て、山越え。一日かかる。休み休み帰って来た。難儀したな」

——尾股へは行商人は来てましたか？

土井「尾股への行商……あったかな（記憶に残っていない）？ さっき言った畑が出来てからは小豆を作って、それを球磨郡の人の米と交換していた。米がなかったっちゃから。ヒエ・アワばかり食べられんもんな。でも食べるしかないから。米を少し混ぜて。最初の一年くらいは本当に苦勞した。焼畑して畑つくるようになってやっと腹いっぱい食べられるようになった。食べ物のことでは喧嘩が耐えなかったですね。

配給は最初は村所までもらいにみんなで山を越えていった。一日がかり。大変だった。後になってから清水の事務所が配給の受け取り所になった」

——衣服を売る人は来ましたか？

土井「さあ……。おったっちゃないかな？ つぎはぎをあれする人がねえ」

上米良「服を扱う人は藤田さんという人がいた。80歳過ぎてるが今でも車である。あの頃は歩いて村所へ来てたもん。最初は歩き。次は自転車。単車でもきよったわな」

土井「ああ、そうそう。唐草模様の大きな風呂敷、かろうてよう来てたよ。うちは南郷村の土川まで食糧貰いに。お父さんが。親戚がおって。わけてもらって大

藪越えて、一日二日帰ってこんかった。取締りを消防団がしよってな。ふつうは見つかったら途中でとりあげられたよ。闇取締り」

——でも南郷村の親戚から貰った米は闇じゃないでしょ？

上米良・土井「……いや、闇よ。配給以外は全部、闇扱い」

土居「だいたい村に他所もんが入ったって。連絡が入るから（食糧をもらいに来たことがすぐ分かる）。わたしたちは食べることで精一杯の子供時代。学校も分校だったし勉強するよりは食べ物を手に入れることが大事。じゃからわたしたちは子供の頃からずっと労働。学校でも元気よい先生が子供たち連れて焼畑。学校には大きな炭焼き窯が築いてあった。冬の燃料にしたんじゃないかな？ あの頃は山は全部清水産業のものでしたから。どこんでも伐って、いきなり火を付けよったですよ。いきなり（笑）、燃え放題ですよ。わたしたちは木の上に登って焼けるのを見てたら『煙巻かれるなよおー！』って大人に注意された。焼けたら喜んでそこに作付け。ここで育ったから、苦勞しとるよ（ふふっと優しく笑う）」

⑤塩がない

土井「塩の配給もあったけど、なかなか手に入れることが難しかった。芋やら持って行けば出す……」。

上米良「……そうよね……」

土井「一握りの塩がもらえんちゃから。人間は塩なかったら食べられん。その塩がないとよ」

⑥配給の味噌や醤油

土井「味噌醤油は配給しかない。子供だけ留守番しよったら、親が帰ってきたら、土間に醤油のビンがひっくり返って中身は空っぽ。子供たちが気づかない合間に、誰かが持っていった。親はすぐわかるわ。あの時代は、そんなこともあった」

——都会より田舎のほうがまだ食糧があると勝手に思っていました。

土井「ないわね。まあ、農家の場合は、品しな持とったけど」

⑦尾股の墓地

土井「尾股の奥の方（南はじ）に墓があった。たいまつ灯して何回か行ったもんな。大人になってから、狩

りの最中に墓の前を通ったことがあった。人には言わんけど自分なりにどっかに墓あった筈じゃけどね、って思ったけど分からなかった。今のような墓石はないから。だが相当埋けとる筈じゃ。亡くなった人にお供してついて火をとぼして。昔は埋葬が夜。夜暗くなってから、寂しい道をずっとついていった。子供は怖い、夜は。それが人が死んだとに（余計に怖かった）。全然地形が変わってっちゃろ。道路がつくってな。昔は山道だったけど」

上米良「あの近くでリュウジンの親父が針師をしよったな」

土居「あそこどっかモウソウ竹があったはずじゃけど。子供の頃竹切りに親父に連れられて行った。あそこしか竹藪がなかった。引き返してくるときがもう、肩が痛（いっ）てえーって（顔をしわくちゃにして苦笑）泣きかぶって帰ってきた。親父はどんどん先に行くから1本か2本、かたげて帰って。それ、思い出す。大分しも。リュウジンさんという人の家のあたり。下の方には2軒しかなかった。熊のおるような穴もあった。場所ははっきりと覚えてないけれど。ホントに熊がおるような気がして怖かった。親父は器用だったから家で使う籠や何かを自分で作ってた」

——神社がありましたか？

土居「シリナシのサエ道には途中山の神さん祭ってあったけど、神社というものはなかった」

——正月にお参りするというのは？

土居「そういうこともなかったですねえ」

——じゃあ尾股の下のほう、学校から下のほうは、人家もあまりなくて、お墓と竹取りにいった記憶しかないですね。桑ノ木谷、トドロ谷、ジンゾウ谷、イケス谷、チョウサン谷という名前が地図に表記してあるんですが、ご存知ない？

土居「（考えこみながら）……そういった名前は分かんですねえ……。あの頃は上の方が拓けてて、下のほうの山を伐ったのはあしたちが尾股を出たあとの時代ですからね」

⑧そのほか

——村所のほうでは映画をやってたっていいですが、土居さんがいたころは？

土居「尾股はない。芝居の人は来た。あちこち回って。ひょうきんなことして笑わせてましたね。年何回か来た。明かりもないし、台を作って火をとぼして。さび

しいとこよね、尾股は。狭間さんは電報を持ってきた人で、どんなに夜遅くても電報を届けるために一人で尾股峠越して歩いて来た。『怖い』って言ってたね。色々な話（夜道の怖い話）もあったよね。今あたしが大人になっても行けて言われてもよう行かれんもん（笑）。親が『泊ってけ』って言ってても狭間さんは帰って行った。子供心に気の毒に思った。郵便配達はまだ別の人で小林さんて人がいた」

(2) 山仕事の思い出（岡村春実さん）

岡村春実さんは昭和14年生まれの68歳。村の森林作業員の組織、FK隊の元副隊長である。FK隊8年目の田仲一成さん（32）より紹介して頂いた。田仲さんは福岡県北九州市の出身。自分の体で色々な事を知りたい。その一心で作業員になった。そんな田仲さんにとって、岡村さんは善き導き手となってくれた。現場での作業中、岡村さんは何げなく語りだす。その現場の昔の風景（今とは全く様相が変化している）やそこでの体験談。動植物が現す季節の変化。彼の言葉は、田仲さんの山への眼を育ててくれた。大変な仕事だが、一度も辞めたいと思わなかったという。岡村さんの生まれは椎葉村だが小学校1年生のころ尾股へ移り、10代後半までは親子で炭焼き、20代前半はパルプ材の伐採、それ以降は土木工事やトラック運転手、最後にFK隊を10年務めた。猪狩りと猟犬育ての名人でもある。田仲さんにも同席いただき、話を伺った。

①尾股の地図を見ながら

——尾股の谷の名前って覚えていますか？

岡村「うう〜ん。何ぼか（いくつか）までなら分かつとですよ。小学校時代ですからねえ。小学校一年生の何か月かだけ尾股じゃってなあ。アシガルダニとかいうとがあるですもんね。事務所があるが。あそこのちょうど国道の谷がアシガルダニ。おまえ、トヤガタキは行ったよな。むかーし」

田仲「ああ。けわしいーい」

岡村「ああ。ああ。あっこ行ったよなあ。FK隊で」

——地図で場所を教えてください。

岡村「むっかしのアレが今とぜんぜん違うからなあ。道変わってしもうたもんなあ」（本田、地図をガサガサ広げ尾股を探す）。

岡村「眼鏡。眼鏡貸してんな。なんし……こんだけ小まいけりゃ……（笑）」

— おっきい地図もあるんですよ。

岡村「いやいや。これで大丈夫ですよ。眼鏡かければ見えよっぱい。俺も（笑）。見ゆる、見ゆる。ここが村所じゃから……村所の尾股じゃなあ。ここが尾股川じゃから。こっちは熊本県じゃもんなあ。尾股は土居さんの親父に聞いたらもっと知っちゃる（土居栄太郎さん）。元気のいい人は、あん人だけじゃね」（岡村さんと田仲さんは地図が読みづらい様子）

岡村「……（地図の尾股峠を指で示し）これが峠じゃろうと思う。ねえ。やっぱこれ（尾股と江ノ口の境となる尾根筋を示し）の西側が江の口ですね。横野からこうして（東に向かって）降りて行かんじゃならんから」

田仲「（おぼつかない様子で）これは……ヒロシさんってこの作業道の道じゃねえ」

岡村「ああ、そうじゃろうねえ。じゃっから……これはかなり昔の地図じゃろう。今は新しい作業道がものすげえ入っとるもん」

— そうですね、この地図の最後の現地調査は6年前ですね。

岡村「でしよう。もう～6年前とは。ベラっと（まったく）変わっとる筈ですよ。今の国道265号線だけは、昔から尾股まであったとですわ。尾股から先は小林市まで行くっちゃけん、今は道が塞いでしもうたですもんねえ」

— さっき言われたアシガルダニはどこにありましたか？

岡村「事務所のそのところの谷ですよ。（2万5千分の1地形図を見ながら）こげな小っちゃい地図はわたしたちは判らんもんな。清水橋の、まちィっと下じゃなあ。清水橋は事務所の下のおっきな橋じゃもんなあ。学校のおっく（奥）の方に。あれじゃと思うが……」

後日土居さんから聞いた話では、アシガル谷の場所は岡村さんが予想した場所とは違うところだった。ここで、森林基本図に記されたゲタヤニ、桑の木、サカエ、シブキサキ、コシイワ谷といった名前を聞いてみた。しかし岡村さんはシブキサキ以外の名は知らなかった。

—（地図中の位置を示しながら）トドロ谷の横にここに尾俣小・中学校がありますね。

岡村「（パッと分かった様子で）ここが小学校ですか？ そいじゃったら、ここ（シリナシ橋のたもとを示し）あたりよねえ。家がここにいっちょ（1つ）あるでしよう。向かえが清水産業の事務所になっちゃる。

吐合のそこじゃから、間違いないと思う。むかーしの家はずうとこげんして（こんな風に）谷筋にあったとですよ。もうこの無人の事務所1軒だけですよ。もう。あとはなあーんにもないですよ、今は。俺たちの小さい時のイメージがないですわ」。

— これ、大きな谷が2つに分かれて、さらに3つ分かれていますが、谷の名前はありましたか？

岡村「うーん（分からない様子）。なかなか見にくいとよな。こげん地図は。なあ」

田仲「うーん」

— 谷の出口には“高嶽橋”という橋がかかっていますね。

岡村「タカダケバシ、なあ。道路をキリクリかえしてまあ一っすぐ行く、あの橋じゃろうか？」（後日、土居さんから聞いた話でツプロ谷と判明）。

岡村さんが西米良村で初めて暮らした場所は尾股だったが、わずが2、3カ月の生活だった。大人になっても尾股へは仕事や狩りで行くことはあったようだが、尾股川の谷筋の名前はほとんど記憶にない。さらに、このとき用意した地形図が6年前に調査・補足作成されたもの、40年前に作成された森林基本図であったため、2人の知る現在の尾股とはまったく様相が異なっている。尾股は道が台風被害のため閉鎖され、無人化、山林の荒廃が著しく、ほんの数年で刻々と景観が変化する地区であると知った。2人が歩きながら作り上げた頭の中の地図を実際の（しかも今年のものではない）地図と照合させることは、無理なことであった。

②竹内の親方

— どのあたりに住んでいたんですか？

岡村「ジッタラダニ（ベッタラダニ？）とかいうて……うちあたりは、事務所のちょっとした奥のところ。1キロくらい上（カミ）じゃったです。そこからこーう（尾股川ぞいに）小学校さ通いよったです。一年生の3カ月ばかりいて、それから村所（の縄瀬地区）に引越したから」

— お父さんの現場が変わったから。

岡村「はいはい、ですよ。で、縄瀬の中学校に行った。縄瀬谷に大きな製材所があったから。マルハツ製材の。あの頃は2、30軒の家族がまとまって親方さんについて、移動しよったですから。子供まで連れて100人くらいで。3年、4年、10年とかで、ヤマが終わってくけん、次さに移動していきよったけんあ。そのうちの何軒かは、

また別の親方さんについて行く人もおるしのお。そういう式（風）じゃったですわなあ。昔は」

——じゃあ岡村さんが付いてた親方さんは何ていう…

岡村「竹内。下の名前はヨシオって言ってあったかなあ。それは有名な人ですよ。尾股に記念碑が建ってある」。

——あ！そうですか。へえ～。

岡村「そったけ、偉い親方さんだったですねえ。で、親父の姉さんの旦那じゃったもんで、じゃから親父がついとったわけ。ずうっと。親父は離れきらんでな」

——じゃ、片腕のような感じだったんですか？

岡村「いやあ！ まだ他にうちの親父の兄弟が何人もついとったけん、俺の親父は片腕なんていうのじゃなかったですね」。

——竹内さんは熊本の人ですか？

岡村「竹内さんは和歌山の人。和歌山から九州に流れきて、そして人夫集めて。和歌山では白炭しよったとですよ。備長炭じゃけんなもんですから」

——白炭を焼いていた。

岡村「はい。それで最初は竹内さんも焼くために100人くらい連れてずっと、そいじゃからこげな山に何十窯も築いて歩いて。山買うて。そいが木炭が売れんことになってからパルプだけになって、中の内のいいやつは木材にして出すし。その竹内の親父さんも多良木に立派な家を建てて多良木で亡くなったとです。それから（それから）竹内っちゅう、山師（のグループ）がピタッとなくなったわけですな。親方が死ねばですね。竹内の弟が別のところじゃしよっとよ。だけど兄さんについとった人夫は付いて行ききらんとですわ。県外じゃし、もう年代も違うしな。それから、この人は西米良の中でほとんど生活しよったとですよ。土方もしよったし、山師もしよりやったしねえ。尾股峠のところ、人夫を雇うて掘って道を繋げた（造った）人です。尾股に記念碑が立っとつです」

——板屋へ向かう道ですよな。

岡村「掘ったのはちょこっとだけじゃけどなあ。そうそう。途中までは板屋からも尾股からも道が来よったわけです。昔のことだから誰も（峠を）掘りもきらんし（掘れない）、竹内は尾股の方の荷を出すために道がないと通れんもんじゃから、自分で道を掘ったわけじゃ。事務所のとこに記念碑が立っとる」

——それは昭和の話？

岡村「うん。それは豪いの人（すごい人）じゃったらしいですよ。自分は竹内さんのこと、ちょっとしか分からんですけどね」

——じゃあその親方さんのことはちょっとは覚えている？

岡村「うん、そん、体やら顔やらは、ちょっと覚えとる。痩せがれの……うん。ちょっと、こう、背の高い人じゃったね。なんか……あーんま、肉は食べん人じゃったと思うねえ」

——肉を食べない？

岡村「魚だけのような……感じの人やったですねえ」

——竹内さん自身も尾股で炭を焼きましたか？

岡村「いや、ない。親方さんは自分は焼かんで人夫たちを養うていくですわ。土方にしたって同じことですわ（笑）。社長は仕事せんですわ。あれと一緒にすよ」

③竹内の親方から離れ、轟八重でテヤマを持つ

岡村「そっで、親父は炭をずうっと焼きよって、『この親父（親方）とばっかやとつたら自分が儲からん』ちゅうことが、親父がやとつ分かったですよな。はっはっは。親方ばかり儲かるわア。そりゃ。それで親方とポッと別れてねえ。山を買うて。そって、親子三人で焼いたとつとです。自分が今度は別の親方に炭を高く売らるるわ。その頃は、炭を買う人は、もう、何人も車持って来よったから」

——（一生懸命考えながら）そっか。雇われて焼く人もおれば、自分で山買って炭作って親方さんに逆に売る人もいた。

岡村「そういう人はテヤマっちゅうわ」

——てやま？

岡村「うん。うん。テヤマ。自分で山買うた人。テヤマの人はほれ、田仲くんが高うでくれたら（買ってくれたら）、田仲さんにやりゃあ（売れば）儲かるわ」

——ああ～。

岡村「そういうところにうちの親父がやとつ勘付いたわけですよ。何十年あとにね（笑）」

——ははあ（笑）

岡村「自分で金ば、ちっと作ってて、買うたわけじゃ。それが轟八重のあの一番嶽山じゃ」

田仲「ああ、あの国道の……」

岡村「うちの親父が儲けたっちゃもんな。田無瀬のあの木造橋のちっと下のあたりから5、600メートルくらい国道の上のところ。まあ～、猿でん歩けんような嶽



写真1 縄瀬の白炭窯

やま山（険しい山）を親子三人で切って焼いたとですよ。で、儲かったとばい。はっはっはっはっは（笑）

④井戸内での最後の炭焼き時代

岡村さんの父はかつて白炭焼きの大会で1位をとったことがある。釣りも猪狩りも得意。猪を1シーズンで70頭も獲った。岡村の親父はバカごとと獲りよったな、と言われるほどだった。お金を稼ぐためにするわけでもない。ただただ、山や自然を愛する父だった。山師には酒を好む人も多かったが、父はまったく飲めなかった。岡本家の冠婚葬祭で人が集まるときは、わざわざ客の酒の相手に人を雇うほどの下戸だった。ちなみに岡村さんの父は終戦を南方ブーゲンで迎えたが、召集された他の兄弟7人も全員復員した。強運に恵まれた兄弟だった。

岡村「轟ヶ八重で3年か4年か焼いて、井戸内谷の嶽山の奥に移った。あっこ（あそこ）でもう炭山ちゅうとが終わったですよね」

—あのあたり、県営養魚場の大きなイケスがありますが、あれより奥ですか？

岡村「あそこを、ま、ちいっと、1000メートルくらい奥ですねえ。セコダニってあるですわ。その谷のどこを焼いて。もうあっこで炭焼きが終わった。あっこで兄弟ほとんど学校卒業したもんな」

岡村「井戸内の山を親子で弁当かろうて、シシ罾かけに回った。シシ罾り罾。クシをこう作って、びーんと跳ねて。炭を焼くアイサアイサ（合間）にしよったわけです。あっこまでは備長炭を焼きよった。じゃから小っちゃい炭でっちゃ15キロ入る。今の茅で編んだ、ダツっていったけど。備長炭っちゃやっぱ重いですから。黒炭じゃったら大っきくせにや目方がないですわ。備長炭っちゃものすごく重いけん。小っちゃ

いとで15キロ入ってたわけ。うちあたりも小っちゃい体やったけど5俵くらいはかろうて出しよったですよね」。

—15キロを5つ？

岡村「うん」

—75キロですね（タジタジという感じ）……。

田仲「うん。75キロ」

岡村「そんげをかろうて出しよったですよ。中学出てすぐの頃。兄貴は6俵持って出しよった」。

—はあぁ〜。（首を振り振り）すごい……90キロですね。

岡村「あの時代はもう……。自分の体より他になあんにもなかったからですねえ。今は機械が多いですけどね。（ワイヤー）線をずらしたり張ったり、あれがあるけん。あの時代はそりゃ、あることはあったけど高いけん、個人では買いきらんですもん。結局は自分の体で。ふっはっはっはっは（笑）。もうせにやあ、せならんごとですわね（どうしようもない）。それだっちゃ、結構金になりよったですもん。やっぱイッシュケンメイ、しよっとですわ。うん」

—昨日、平瀬の備長炭の窯を見に行きました（写真1）。

岡村「ああ。そりゃいいところを見たわ。備長炭はものすげえ……」

—炭を出しても、ボワってものすごい火力。

岡村「です。です。ほんっとに火だけです。あれじやったとですよ、うちが焼くとは」

—じゃあセコダニで築いた窯はいくつですか？

岡村「いっちょ（一つ）ですよ。そいで1回だけで80俵出よったからですね」

—それ……。全部出したんですよ（岡村さんと目が合いながら）ははははは（笑）！

岡村「そりゃ一日で出さにかんちゃから（笑）」

—一日で！？

岡村「はい」

—歩いて！？

岡村「そうよ。下の道路まで歩いて背負うて出さにかんぞや。80俵を兄貴と2人で。そげんしよったと。その暇に親父が罾かけて。おいどんったちが炭出す合間に。『お前どんば出しとってくれ。俺は罾かけに行ってくる、罾見に行ってくる、罾ギリにいつてくって』って。3人おったから、そういう面は良かったわけじゃ。じゃから帰ってみれば、親父がイノシシ3つも獲

ってきて置いとちよる。ねえ。そげん獲りよっちゃけん。その時代は」

——そのイノシシは売るんですか。

岡村「売る。今のごと電気がないでしょうが。あっこは(笑)。あのランプ。石油こう入れてランプちゅうて、(本田は)知らんかなと思って。知っとっどですか？あれを夜明すような生活じゃったから。イノシシを獲ってきて何日も置けんわ。腐れるけん。じゃから食べるしこ(分)取っといて、あとは村所に持ってって旅館の人に売る。自転車に積んで、(サドルを握るまねをして)ギコギコやって(笑)」

——ああ～自転車で(笑)

岡村「はっはっはっは。自転車で。米も積んで井戸内まであがらにゃいかんちゃから。(自転車)押して。親子で3台持っとったですもんね。一人ずつ。2人で乗ったらブレーキがわかるもん」

——そうか。じゃあ兄弟2人で自転車でこう、売りに行って。へえ……。

岡村「じゃからその時代はその時代でけっこう楽しかったとよ。今頃になったら村所で活動写真……映画ですよ、今の。あれ見に来よったですよ。親子3人で」

——ああ、親子で。男3人で。……。(その姿を想像し)ふふふふ！

岡村「はははは」

——自転車で。

岡村「自転車で」

——あっこの道を、チャーッと走って行って(笑)

岡村「今は舗装してあるわ。昔ア、あんた、こうガタコタ道ばい？あれ行きよったわ。映画見たいばかりに。だから、映画代はその炭を積んで行く訳よ。自分のに、1俵ずつ、俺も、親父も、兄貴も。そいでその映画の親父に持ってって『これやるけん映画見せてくれ』って(笑)、炭をやるとよ！そいじゃから金は要らんですわ。それやっとならば、『券ばこん次んともやっどくで！』ちゅうて券をくれよりやったわ」

田仲「ときどき、あの～。盗んでやりよったわア(笑)？」

岡村「ああ、そうそう(笑)。親父がおらんときは兄貴と俺で(炭を)隠して行きよったわ(バレたら親父に怒られるので)。そういうことじゃから、結構楽しかったよなあ。まア～だあんた。中学校卒業して何年もならんうちじゃから……17、8歳ですよ」

——覚えてます？ 映画は。

岡村「あの頃は、あの～、笛吹童子とかいって(と行って、吹き出す)」

——あはははは(みんなで爆笑)

岡村「あんたたちは知らんでしょうがあげんとじゃったからですね。あの、なんか、こっけえ(ここに。額に指を示して)傷のある……旗本退屈男か。そんなような映画ばかりよな。昔はな」

——アメリカ映画とかなかったんですか？

岡村「いやあ。やっぱり今の洋画とかいうのは見たことなかったな」

——テレビは、ない？

岡村「何が！電気がない！(みんな爆笑)。電気がないとばい。おめえ(笑)。ほら。電気がないから、わざわざ映画観に来るわけよ。ほって、その電池を入れるラジオが出来たとよなあ。山のなかでってほら、箱のやつなあ。それで、それくらいですよ。そういう生活だったとです。そいじゃから夜もはよーう寝て、石油もなんもない」

——勿体ないから。

岡村「そう。勿体ないからはよう寝るわなあ」

ちなみに今でも岡村さんの夜は早い。夕方6時就寝、真夜中の2時に起きる。

⑤「ちょっと退いてんな、倒してみせる」

やがて兄が独立したあと、岡村さんと父と2人で炭窯を焼いた。しかし、炭の需要はどんどん下っていった。ちょうど炭作りでやっとな一人前になったか、と思うと炭が止み、それから伐採や玉切りといった作業の請負に切り替えた。その仕事もやっとな一人前になったかと思うと、今度はパルプの需要が止んだ。常に一番いい時期に、岡村さんはその仕事から離れなくてはならなかった。

岡村「……何年か親子でしたですよ。伐採と玉切りを。ちょーど隣、尾根の向こう側を知り合いの若い人4、5人が伐採して、こっち側を俺たち親子がしよったとです。ちょうど尾根は手を握るような距離になるってしようが。狭いから。そしたら、うちの方の分に、木が立っとな。おっきな木がね。そのこげんするとが(手挽きのノコで切る手つきをしてみせて)半日かかるわ、と思ってた。そんで休憩して、親父と2人で尾根の向こう側の組がするのを見とったら、そん、なにか機械を腕に抱えてきて、『ちょっと退いてんな。倒してみせる!!』言うて。そしたら親父が煙草一本吸う暇に倒れ

たもんな。そんな大きな木が。あつという間に。あんた、チェーンソーゆうたらもーのすげえ早えもんですからな！ わたしゃそんな見ることないっちゃけん！ はっはっはっはっは。……俺りゃあ、『おいどんらも、あつと（あれを）買おうや』言うて、その日は昼間で止めてなあ。も、見ちゃおれんわ。向こうの組のほうが早いもんじゃから。

で親方さんに『俺たちもあのチェーンソーちゅうとば買うてくれえ。俺たちもあれで切るから』いうて、『明日湯ノ前で買うてきて持ってくるからねえ』って親方さんが。そって湯ノ前行きよって戻ってきて、『岡村さん、そのうちパルプ（材の供給）が止まるよね。ここ何年かで止まるよオ。じゃから、そんげな、高っかいもんは岡村さん、買わんがいーよ』ちゅうてから。その時代で、やっぱ7万か8万か。今で言えば70万くらいのやつですよ。じゃから、チェーンソーは買わんかったですね。

それから後はその親方さんのとこの日役よね。毎日。（材を）出すとの加勢や、場所の悪いところの木の手切り。チェーンソーは場所のいいところじゃなきゃ切れんけん。そいで、ずーっと生活して、何年したとは分からんけれど、パルプが止まっていかんごとなった（どうにもならないことになった）。それから親子2人でカワノ建設の土方に行った。初代の社長に俺たちを土方に使うてくれ、いうて。ほおで（それで）行ってね。山師はポッと辞めて。土方を始めたとです。土方はいいですわ。長靴で毎日出来るけん（笑）

——そうなんだ。

岡村「ですよ」

——土方の方がいい。

岡村「土方は、ようはないけど、金もちっとしか貰えんけれど、仕事が切れるってことはまずないですわ」

⑥山が壊れている（井戸内・^{のうぜ}繩瀬・尾股）

近年の西米良では、毎年地図を変えても追いつかないほど、山川が荒れて形状が変わっている。奥で大きな山がどんどん流れている。水がちょっと増えたらどおおーっとその土砂がツ瀬川へ流れてこんでくる。岡村家（田ノ元）の前の大きな川のカーブには、ものすごい深い淵があった。しかし土砂がたまって淵がなくなった。そうすると魚たちがいなくなった。ダム（一ツ瀬ダム）に下ってしまったのだろうという。ダムは日本一のダムだから水はたくさん貯まる。そこに行け

ば餌があるから上流に来る必要もないのだろう。昔は魚がたくさんいた。岡村さんも釣りが好きだった。しかし今は何もいないのでしないという。

岡村「お前が来たころ（8年前）の川は無えとばい。ねえ（笑）」

田仲「ぜんぜん変わった。特にこの2年くらい。2年前の台風で形が崩れ、去年の台風で水で洗った、ちゅうか。谷川がだいぶ崩れた。ちょっとした谷まで」

田仲「山の尾根はそうでもないけど。谷の水が溜まって洗い流した」

岡村「水の流れるところはものすげえ変わったですよ。今は。昔から見ると」

——でも、昔も、谷が崩れることはあったんでしょう？

岡村「うんうん、そりゃあるけど、今みたいになかったですもん。結局その時期にスギがなかったですもん。天然の木じゃから、みんなネバリ（根張り）で、こう張りおうて（平泳ぎのように、じっくりと両手を水平に広げながら）、山を荒らさんですわ。そつとその天然林を切ってパルプにしてしもうてなくなるじゃから、みんながスギを植えヒノキを植え、マツを植えてしもうたでしよ。と、そのやつは根っこがちいっとして広がらんから山全体を持ちきらんんですよ。台風が来たらパタッと倒るけん。ほってでなっんもなくなって崩えてしまうわ。ほれ、井戸内の迫のほうの見てみなんや」

田仲「井戸内はまだましですよ。あー……。繩瀬ら、また豪いすねえ。ここ、ここが豪い」

岡村「尾股が豪いと思うっちゃけど（笑）」

田仲「尾股は前抜けてったんですわ。途中、ツナオさんここ入って……マツタケさんの山から越えていったんですわ。で、（山の荒れ具合は）そうでもない。でもそんな代わりここが崩えちよう。こつから先は行けん。やっぱ今一番激しいのは、ここが崩えちよつたのはものすげえ激しい（尾股峠の北側・小字折戸）」

——この地図に載ってる？ ここ？

田仲「ここ。ここらへんがブワー……で崩れてる」

——崩れるって、この迫が……？

岡村「迫じゃなしに、この山、そのものが、なくなっている」

——え、そうなの!? ここらへんから？（尾股峠の北側に落ちる谷のうち、上桁橋より上流が崩れた。小字では折戸になる）

田仲「うん。こころへんからずうっと崩れてて、こつから先の道は、もう、ない」

——道がないってことは……

田仲「下、下の道がもう、今、川のところが道になっちゃる。土砂が埋まってて」

岡村「(本田がびっくりしているを見て) はっはっはっは (笑)。国道もなくなっつとよ」

⑦アシビシャ

田仲「岡村さんが炭焼きしよったはこのナガサレのほうでしたか？」

岡村「字縄瀬ですよ。村所の」

田仲「ここはァ……アシビシャやね (笑)」

岡村「そうそう、アシビシャ (笑)」

——ん？

田仲「自分が初めて足をびっしやいだ (チェーンソーで切った) ところ」

岡村「最初は怪我したっちゃから。田仲は！ 触ったこともない道具をいきなりせにやいかんちゃから、チェーンソーいうんとを触ったこともない人間じゃったで」。

——切ったってどれくらい切ったと？

岡村「何回切ったか。2回？」

田仲「ああ」

岡村「縄瀬の警察無線のあつと (ある場所) が一番激しかったわ。長靴切ったっちゃん。一緒に」

田仲「あはは。ポショポショ靴の底に血が溜まってねえ」

岡村「長靴の中、血の海の中、靴下はいて。だまーつとったでなあ、最初の頃は。なあ、お前」

——黙ってたんですか？

岡村「ふん。切ったってと、先輩たちが怒るわあ。『まあたそげん馬鹿なことしとつとかァ！』って怒るもんじゃから、こいつは黙ーつとつたっちゃんわ。だいたい顔色も悪いし、どうか、動きがねえ (おかしい)。『おい、お前なんかしたっちゃんいね』ちゅうたら、『(小さな声で) ……足を切った』ちゅうってねえ (笑)。あ～、もう。長靴もうベラッ切っちゃっで！ (長靴の上からぱさりと切っていた)。チェーンソーじゃから激しいわあ」

——うわあ……

岡村「これ (田仲) だけじゃないよ。他にも全部FK隊に入った若い人はほとんど切つとる」

——チェーンソー。

田仲「(しぶい声で) ……斧やら」

——ああ、斧。

岡村「とにかく触ったこともないをいきなり使わにゃ。なあ、その、何時間くらいはこげん式してこげんして (こんなやり方でこんな風に)、エンジンかけてこげんして使うとぞ、って教えるけんど、あんた。3日も4日も教えるわけにやいかんわ。こっちも仕事せんといかんから。そりゃあグルリで (近くで) するけんど、チェーンソーちゅうたら切れる速度が速いから、ある程度離れとつてんと木が倒れていくでしようが。そういう危険性があるから、10m、20mも離れてするけん。怪我したときは黙ーつてから。分からん話よ (笑)。これだけじゃないよ。ほかん人もみんな。怪我しても黙ーつて。なあんか動きがおかしいな？ っつてたら。どうかしたっちゃんいかなー!? っつておらべば (叫べば)、怪我しとる」

——入って一年目？

田仲「1年目くらいかなあ」

岡村「そのあとは、今は怪我せんわ。ただ、ほら、しぜーんと、切れれば痛いし (笑)」(田仲・本田爆笑)

岡村「人の肉を切ったっちゃんええ。我が足を切ったっちゃんから！ そりゃ、痛いわ、だいいち！ (笑) そつたらもうすぐ病院に連れてつて、もう、汚れくされそのままよ。もう何もかんも持つてつて、すぐ入院じゃわ」

田仲「あー……。監禁されちよつたわ」

岡村「ああ、今度あ、看護婦が見張り。じつとしとくと、トズラして出てくつで。じゃっから、こいつはホント退院して1週間か10日かして、また怪我して。(冷やかすように) 看護婦に『また田仲君か！ また来たたとたか！』って怒られよつた (笑)。3回くらいしたっちゃんいかな？」

田仲「いや……そこまでは。他にもあるけどあんま言うちよらん (笑)」

⑧ベテランでも怪我をする

岡村「やっぱ、2年も3年もすると、あげんしたら足切るとか危険性があると自分の身に分かつてくつとです。じゃから今は怪我也せんし。朝はミーティングして『とにかく足だけは切らんごと。それだけは』って (笑)。あとは、斧で切つたりな。ぽつとすべつて足を切つたりな」

——手が滑ることもあるんですか？

岡村「あるっちゃうもんじゃないわ！ 雨のジャガジャガ降るときにから。斧はツルンツルン滑る。濡れれば。そうしてこげんしよって（手が滑って）タアっと足を切る。いやあ、我々（ベテラン）じゃって切るっちゃけん。切らんごとなるには、ホントのこと言えば10年かかる。山師は」

——10年かかる。

岡村「それくらい辛抱せんとね。やっぱ怪我するってすわ。ホントの大怪我っちゃうたら、もっとひどいことになる人も昔は何人もおるってすわ。田仲のあんちゃんの怪我っちゃうとはまだまだいい方ですわ。死ぬこともある。そういう仕事ですよ。危険な、命がもう、カラガラなるような仕事やからですわ。だから言う。俺は。若い人が来たときは。何でこげん仕事、汚い、きつい、ちっとしか金貰えん仕事すつとか。お前たちのような町から来た人間がなーんぼでもってもいい仕事があったはずじゃないか（笑）。これ（田仲）にも何回か」

田仲「はあー……。焼酎飲みよるときですわね」

岡村「おお。昔は焼酎飲みよったけんね、昼ものお」

田仲「寒いけん、飲んじよった」

岡村「寒いもんじゃから、冬は特に」

——あ、休憩中？

岡村「寒いけん。あんたミゾレのジャカジャカ降るときは朝から晩までせんといかんとやから。テントの中に入るとるちゅうことはまずでけん。月曜から金曜までは石が落ちてきてもせにゃいかんとよ」

——石が落ちてきても。月曜から金曜までは。

岡村「降ろうと照ろうとアイサアイサ（合間）はぜってえ出らんといかん仕事ですよ。土日は休まるけどねえ。FK隊っちゃうのは厳しい」

⑨森林組合で23年働く

再び、岡村さんの話。川野建設でしばらく親子で働いていたが、岡村さんの方が建設会社を出た。同じ場所で働くと収入が少なくなったときに家計が苦しくなる。そこで森林組合から山仕事を請け負うようになった。材出しのトラック運転手も7年やった。2回走って1万円。当時としてはまあまあよい賃金だった。そして55歳のとき、FK隊に誘われた。

⑩人間が一番つらいこと

岡村「じゃっから俺若い人にいうとよ。ぜってえ……。あの、人間がする仕事じゃないぞって……。俺、云いよっちゃが」

——お金がしっかり入ればいいですけどね。

岡村「いや、お金はまあまあいいわけです。入るけん。（これから先）仕事なくなる、ちゅうとが分かりよつとですわ」

——ああ、仕事がない、ということのほうが（よく分かっていない）。

岡村「なくなるとが一番。きついっちゃうとは、人間、この、自分の仕事、自分のする仕事なくなるとが、みじめなものは、ないですわ」

——……。

岡村「ほんつとに、何にもないですよ。今度は。それで背広着てお前、ははは（笑）。職員のごと、使うてもらわけっちゃあ。ね。今までが今までだから。ね？」

田仲「——ん、ですね。うん」

⑪FK隊の若手への思い

岡村「ね？ 何にもないっちゃけん。なくなったときがきついから、若い人が入ってきたとき言いよったわけ。陰で。とつてもお前たちの、そん、町場で育った人間に俺たちのようなほんつとのここで（山で）生まれたような人間と仕事一緒にすると、毎日毎日同じことするつとは付いていききらんごとなるって。最中は分からんもんじゃから一生懸命するけれど。やっぱ労働とはきついもんですわ。仕事が切れれば食べることができんわ。じゃから、うちあたり余所者はそここのところがちっと弱いところ。地元の人ならちいっとした田んぼや畑でもあるけれど。それで食べていけるでしょ。それを田仲にいつちばん、それを言うて聞かすのよねえ」

⑫どんな仕事も10年すれば

岡村「俺はここ（頭）が悪りいから、ビンタ（米良言葉で頭のこと）のいい人を見たときは、すぐそげん思う。俺はなんも自分の力でしかする仕事しか何にもでけんけん、それだけ考えとつたから良かったけどねえ」

田仲「俺っちゃは、どっちかっていうと肉体労働」（岡村・本田、ははあと笑う）

岡村「まあ、10年は居らばなんの。たとえあれでも、

途中でケツ割ると笑われるけん。俺、この年でFK隊10年おったとばいって言えば、人はびっくりするもん。10年はやっぱおらんといかん。やり始めた以上はな」

⑬機械はハイリスク・ローリターン

—小川では炭焼きはしましたか？

岡村「いや。あっちでは炭焼きは……。FK隊になってから小川には造林に。その前は行ったことない」

—じゃ基本的に村所の山。

岡村「昔。はい。昔のノコギリで（伐採）する時代はちいとでも。あれは何年もかかったわけですよ。だから山もそんな荒れんかったわけ。何年もかかって最初切ったところは芽が太うなってくるわけですよ。天然木じゃから。仕事でこうして（目前に片手を大きくめぐらす）周りよったから山も荒れんですよ。今のごと重機とか速いものになってから自然林が荒れてしまうた」

—さっきのね、チェーンソーの話に出てきた木、その木をもし自分で切ったとしたらどれくらいかかる？

岡村「そげえ、こげん（鋸で）すっとなら半日はかかりよったと思う。自分で倒して、その玉切りしまつて。本気、煙草一本吸う暇があったらどげな木でも倒れるもんね。あつというま。チェーンソーかけたら。昔はヨキでこうしてウケを三角に掘って、こんだ反対側に回って、今度は真っ黒え鋸のこで。半日くらいかかりよったですよ（笑）」

—途中で休憩して休憩してやりながら。

岡村「おおん。それを玉切つてきれーにするんなら、もっとかかる。それでよかったですよ。結局金になりよったですから。そうすつとチェーンソーなんかになったら燃料なんかも自分で買つて作らにゃいかんですよ。そうすつとチェーンソーがちょっとどこかが欠ける。修理に出せばもう何万ですよ。じゃからノコとかなんたら傷むちゅうことはないもんね。石を切つたつてヤスリをすれば元に戻れる。ヤスリ1本なら何十円で買えるわ。そうすつとチェーンの刃、いうとは何千円とかかかるわけですよ。いくら仕事でけても経費に取らるけん。激しいですよ。じゃから今の仕事はそれでぜんぜん儲からん、というのは、そこですよ。だから、そこに出てきたわけですよ。速いけど。経費が要るわけ。重機なら重機で経費がどんどんかさむけん。だから、何の仕事でも儲からんのはそこですよ。うん」

田仲「重機でも壊せば……。何十万ですよもんね」

岡村「ちょっと傷むれば何万、何十万」

田仲「昔は飯が燃料じゃつたけね」

岡村「はっはっは。メンパ（弁当箱）に飯を詰めて行けば燃料じゃから」

田仲「ああ。（燃料にしては）軽いですね。腹に入れてば持たんでいいけね（笑）」

岡村「何にも持たんで、ええ（笑）。じゃから結構昔はそれで暮らし方、出来よつたとはそこにあつたつですよ。味噌とか、炒り子とか、おかずいれてメンパにつめて持つてつてそれが我が（自分の）燃料じゃから、一日でけるわけですよ。重機とか機械とかになれば、ちょっと壊れると今は1カ月2カ月の給料がポツと飛んでいつてしまうわ（笑）。修理代に。燃料も、自分は動くけど、機械に燃料つめねば何も動かないわけですよ。ちょっと故障したらもう……。自分はいじりきらんとじゃから。呼んできて頼まにゃあ……。土方の人もそうよ。昔はツルハシやらカネテコやらで結構金になりよつたけど。今は違うわ。重機もいいとを買えば、ちょっと傷めば……。それこそ人間の金の何十倍もかからにゃなおらん。土方はもっと激しいと思うよ」

田仲「南方の方とかで見る、みーんなツルハシ持つてずーつと一列に並んでやる、やっぱあれでしょうねえ」

岡村「昔はあれじゃつたつからなあ。今でも、あの、津波でいかれたつとは……」

田仲「ああ」

岡村「やっぱ昔のやり方に頼つとるわあ。あれが無くなつただけでも差よね。それであれより仕事ははやくでけるとなつとるけど、金にはならん。俺がいうとはそこ」

田仲「タバコ一本で切りよつたらつですねえ。はは（笑）」

岡村「ばばーつと切つてそんだけ片付てしまつたら、最後で計算してみれば結局はこれ（道具を振るまね）を使つとつた頃のほうが、儲かるつですよ。だから俺も手切りでしよつたけど、隣で4人も5人もチェーンソー使つて仕事しよつたけど、給料日になつたときは、（自分は）みんなと変わらないごともらいよつたもん。結局、燃料代も修理代も要らんわあ。木を切る鋸さえ持つとれば。ヨキは、石切つたときは砥石で研げばええ（笑）。その差じゃと思うがのお。そら、確かに見た目は激しいよ、チェーンソーで木を切るとは。じゃつてんそれ、速いばかりじゃけん。手切りで親子でもつて木倒して、あの時代の方がお金は遥かに貰いよつた」

—ふーん。

岡村「じゃっから、確かに速い仕事という、確かに金になるように人間思うけど、(そう)じゃあない。あとで、今になって、なお思い出す。じゃが、チェーンソー使い始めたときはそこまで考えんもんなあ。やっぱ速いことだけしか考えんけん。そん代わり給料のとき余計貰うたこと、なかったもん。たっしかに、そら速いよね。今の若い人には想像もつかんような話じゃけど。やっぱその時代はそれで楽な生活しよったですもんね。昔のほうが。そら今のごと車に乗って、ちゅうことはないし、自転車しかなかった時代じゃけん(笑)」

—親子3人で

岡村「ああ、親子で。そういう時代じゃった。そういう時代の方が生活はやりよかったと思うね」

(3) 槇ノ口発電所と狩りの話 (上米良安芳さん)

上米良さんは^{しいば おおかわち}椎葉の大河内^{いば}で代々神主を務める家に生まれた。8人兄弟の2番目である。狩倉神社という神社は現在も大切に護られている。参道には槇の木で作られた鳥居が立ち、境内はスギ、カシ、タブ、サワラなどの樹木に覆われている。祭神の今森という人物は、領主の次男坊で大変な狩りの名人だった。村人の尊敬を一身に集めていた。しかし長兄那須兵部太夫のうらみを買うところとなり、ある日の狩りの最中命を奪われたという。上米良さんの父は月1日と15の日に掃除をしてお祓いを挙げていた。もともと上米良さんの生家は山の上のほうにあったが、戦後現在の場所へ移転した。元の生家は空地となっているが、そこに1本の古木が立っている。ここに今森の塚があった。塚も生家とともに移転した。塚には「大正十年十月吉日 今森墓傳説塚」とあり、隣には新しい塚もある。そちらには「今森之墓 生前名那須内膳 当村氏神トシテ今森神社ニ祭ラル 平成元年四月 椎葉利美建立」と記されている。かつて生家には古文書の類、袴の畳まれた大きな衣装箱や火縄銃、製材用の大ノコ、ハツリヨキ、チキリ(計量器)などもあったという。

上米良さんは中学を卒業後、^{なんごうそん}南郷村の高等学校へ進学した。老婦人の家へ数名の同級生と寄宿した。大変に躰の厳しい女性だったそうで、掃除や大人としての礼儀を厳しく教えられた。やがて戦況が厳しくなると、学徒動員のため宮崎市の工場(現在の旭化成)で2年間働いた。大空襲にもあった。目の前で自分よりも幼い

中学生たちが亡くなる様も見た。空襲ののち、命からがら、歩いて椎葉まで帰りついた。工場ではわずかながらも給金もあった。上米良さんは大切に給金を貯め、そのお金を元手に牛を飼うように父に勧めた。当時は博労から牛の仔を預かり育てることで幾ばくかの収入があった。牛を育てる経費を考えれば少なすぎる額だった。それよりは自分で牛を飼った方がいい。戦後の食糧難の時代、まだ十代の上米良さんは精一杯に家族の将来のことを考えていた。

18歳になった上米良さんは西米良村の^{まきのくち}槇ノ口発電所へ入社する。まだ、発電所の立ち上げ時期である。所内での機械整備では油まみれで働いた。山中でのシュラを使っての用材搬出、鉄塔張り、次々に穴を掘り、電信柱を立て続けることもあった。労働は厳しかったが学ぶことも多かったという。

①山で怖いのは犬と人

—山でカリコボウズは見たことありますか?(カリコボウズとは山中で人をおどろかせる不思議な存在。現在は村のシンボル・キャラクター)

「いや、それはない。そういう話は聞くけれども、わたし自身、まだそんな怖い目にあったことはない。まだない! ははは(笑)」

—もう何十年山に入っても、ない(笑)。

「ない。子供の頃から相当夜の山にも行きよったけれど。槇の口の発電所に勤めていた頃は週に1回、家(隣の椎葉村大河内)に帰った。仕事が終わってから、で、翌朝また発電所に食糧持って大河内まで歩いて帰って……」

—食べものを持って帰った。

「自分だけのものじゃなくて、結局6、7人、余所から来た人も宿舎にいて。食糧ない人もいるじゃろう。だから、ものすごい要りよったですね。熊本からも北九州からも来てたから」

—週に一度、6、7人分の食糧を大河内から運んだ。

「冬は夕方5時には暗くなるですもんね。次の日は朝8時が始業。朝はかなり早く出ないと。6時頃にはもう大河内を出ていた。ははは。やっぱ、(山のなかで)一番怖いのは人間と犬。犬はあの頃相当多かったですからね。猟犬の放たれたやつは人に噛みつくのもおっただすからね」

—追いはぎとか?

「うん。まあそんなところ。かなり、あの頃は」

—いや、怖いですね！ それは！ 一人でいたら、身ぐるみはがれるくらいならまだいいけれど……。

「そう。だからお互いに正面見たら、見合っただけにも取っ組みすっちゃうのは、そりゃ自信があるけれど(笑)」

—あ、それは自信があるわけですね！ あはは。
「でも後ろからポカッとやられたら、たまらん(笑)」

②発電所の所長、生活の楽しさに尽力

「あの頃(昭和22年)はやっぱり相当人も多かったですからね。トビノモトでは殺人事件もあった。山の仕事仲間同士で酒飲みよってケンカになってオノで頭を一撃して。昭和26、7年ごろ。もう、あの頃はケンカが多くて。映画があるわけじゃなし。酒飲むだけが楽しみでしょ？ 飲みすぎれば色々ケンカもありよった。仕事でトラブルもあって。祭りでも」

—ああ～。

「でね。九電の所長さんが、僕たちが入って二代目の所長さんが、そういう文化の遅れを米良は取り戻さなきゃならんということで、屋外でしょっちゅう映画をやった。『何月何日に禎の口発電所でやりますから、見に来ませんか』っちゅうて、部落の人も全部呼びかけて。テレビにしても、田舎のわりには早く見れるようになった。それも所長さんがものすごく努力してくれたお陰」

—何と言う方ですか？

「津末清澄さん。大分の人で今年の1月に亡くなられたですね。昔の上米良小学校にも学校の先生が多かったですからね。でもどこにも遊びに行けるとこないし。発電所の人と休みの日はテニスをした。これも津末さんが提案した。テニスして飲んだりするのが楽しかった」

③一ツ瀬会

禎の口、村所はかつては多くの九電社員とその家族で賑わっていたが、現在は機械化され無人となった。設備のメンテナンスなどのため、時折西都から社員出張してくる。上米良さんは九電時代の後半を一ツ瀬発電所で過ごした。今回の調査では一ツ瀬発電所を上米良さんと一緒に見学した。十数名いた職員のデスクがあった部屋には大型機械だけが整然と並んでいた。昔を知る上米良さんにとっては寂しい光景だった。上米良さんはかつての同僚たちとともに一ツ瀬会という同

窓会を作った。毎年秋にあさぎり旅館(上米良さんが退職後に開いた村所の旅館)で会を催していたが、近年は台風災害などで道路の決壊が多くなったため春に変えた。今年で11回目になる。発電所立ち上げ当時の苦労をともにした仲間たちが、懐かしい昔話を語りあう大切な時間である。

④狩りのこと(動物の通り道・アセリ場所)

「狩りはうちの親父がしよったけど、発電所に入ったばかりの若い頃はそんな余裕がなかったですからね。でも小学校6年生の頃から親父の鉄砲持ちで付いて行きよったですよ。僕が52歳から始めた。やっぱ山歩くのはちょっときつかったですもんね。オチヨ淵は動物が川向うによく通るところですよ。非常に場所がいいところ。この淵は今ほとんど浅い」

—浅くなってるから渡れる……

「いや。深くても動物は渡れる。泳げるから。水泳は練習したわけじゃないけど上手いですよ。猪でも。鹿でも」

—なんでここ、渡るんですかねえ？

「場所的に。昔はもうああいうコンクリなんか使ったことはなかったですからね。どこでも通りよったけど。今はもう、川べりでもブロックで築きあげるでしょ。じゃからここ(オチヨ淵)は、川端に下りるにしても簡単に降りられる。魚釣りでも今はほとんど降りられるようになってる。だから動物がすごく通る。道路端のちょっとしたところ、猪がアセった跡がある。アセったちゅうとは、ドングリとかエサをあさった場所。そういうところで様子や爪の具合を見る。僕たちは狩りの前日は必ず回って見る」

⑤良い犬は猪を追い降ろす

「猪は人には来ない。手負いの猪は来る」

—以前アスファルトを走る猪を見たことがありますか、相当速いですね。

「あれ、体当たりするとよ。何もないとこじゃつたらしょがないけど、立ち木があればそこに上ったがいいけど。とても追っつかんね(間に合わない)。ものすげえ早えもん。もう、大けな石が転がってくるみたいなもん。とてもじゃないっすよ」

—犬って、どこまで追いかけるんですか？

「その犬の習性。追うのもいるし遠くまで追うのもいる。だから犬の仕込み方もあっちゃけんですね、小さ

い頃から猪を追い詰めて小さいころから味を覚えたとかっちゅうやつはもう、とことんまで追うですがね。『追い詰めたら食べられる』と思うですから。ははははは」

——仕込むのは飼い主？

「そうです。じゃから代々犬を持っとらんと駄目。経験ある犬と一緒に連れて行くわけですから。初めての犬は」

——犬は犬から学ぶんですね。

「うん。最初は何も経験もない犬を連れて行ってっちゅうのは、そりゃ大変」

——仕込むなら仔犬の時から。

「母犬と一緒においとけば、山に行っても自然と覚えるもんですもんね」

——発電所に勤めていた時代、猪を110頭獲ったと聞きましたが？

「はい。もう、夜勤明けだろうが、何だろうが（笑）。時間があれば行きよったですからね」

——猪を最後にしとめるのは人間？ それとも犬？

「犬。あの頃はほとんど鉄砲で仕留めるっちゅうことはなかった。2人か3人で犬積んで、トラックで走りよって。犬っちゅうのはものすごく鼻が利くから、猪の匂いがしたら鳴きようですよ。早く降ろしてくれって。だから場所を見て、色々考えて降ろさんと。人家があるとこじゃいかんし。そうするとすぐ犬が追いついて、もう犬が押さえとるとこ行って、ナギ持って刺すわけですね」

——犬が、倒してるんですか？ そこで。

「そうそう。倒しとる。僕たちの場合は8匹か9匹かは連れてきよった。犬が良かったら追って行かんでも、近くでたいがい獲りよったです。犬が良かったら猪は絶対上さ登らん。もう、早く逃げにゃいかんがら下さくだっくてくつですよ」

——上に登らない。

「上さ行くっちゅうとは、結局スピードが出らんでしょ」

——あ、だから石みたいに転がるように降りていく…

「うん。だから下さ来たら絶対獲ったですもんね」

⑥猪を仕留める

——犬はのど笛に喰いつくんですか。

「猪にもよるけど、猪の喉っていうのはものすごく大

きいから。犬はなかなか喰いつききれんとよ。だから喰いつきやすいのは耳とかここ（足の付け根の柔らかい部分）。ここが一番噛みつきやすいっちゃん。動物は」

——そうすと、人間が追い付いた頃はもう猪はガバ—と倒れてるんですか？

「いや、早いうちじゃとまだ立っとなすね。そいで大きい猪はあんま鳴かんけど、小さい猪は豚が鳴くようにキーキー鳴く。だからちょっと後ろから行って、心臓めがけてナイフで刺す」

——危なくないんですか？

「いや。危ないときもある。やっぱり、かなり若い時でない危険ですからされんですね。猪が大きければ、犬を振り放すことがありますからね。身振るいしてすね」

——テレビで熊野の人が罾にはまった鹿をカッターナイフでとどめをさしてびっくりしたんですけど、そんなことできるもんなんですかね？

「僕はカッターナイフでとどめさしたことはない。あれはすぐ折れるから。ようしきらん（笑）」

——ですよええ。

「大きいやつはようしきらん」

——怖くないですか？ 生きていてっかい動物を。

「こわい。犬と格闘するときは、猪は犬の方を振り払すことばかり考えて、夢中になっとなすね。しかし人間が行ったらですよ、もう犬とはせんで、もう人間ばかり見ようですよええ。だから、犬より人間の方が怖いっちゃん。そりゃ怪我した人も相当おるよね。猪にやられて」

⑦夏の鹿と冬の鹿

「夏の鹿と冬の鹿はぜんぜん（語気を強めて）違う。夏はいい。春になって、青草が出てくっでしょ。あれを鹿がものすごく好んで食べる。で、脂肪が乗って。八月最高に肥えとる」

——昨日岡村さんちで鹿刺しいただきました。今が一番おいしいよって。

「そりゃ良いもの食べれた。夏は鹿がどんどん肥えて。もう最近鹿は発情期が早いでもんね。9月の終わり頃になるともうオスは全然食わんですもん」

——メスばっか探してんですか？

「うん。そう」

——やつれて、啼くんですか？

「うん。そして、完全に12月になったら脂肪は全然な

いです」。

—発情期が早くなっている。昔はいつぐらいだったんですか？

「12月の末くらい。今から45年くらい前までは鹿の啼き声は聞かんかった。この付近では。今はうちのすぐ前で啼きよる。今は10月の初めだったら啼くですね。昔は11月ごろだった。発情期になったらオスはほとんど食べん。してこんなに（片手で5センチほど作って見せて）皮下脂肪があるのが、3カ月くらいで全然なくなるですからね。春になったらその体がまた3カ月したらこんなに脂肪がつく。だから夏の鹿はうち辺りでは、刺し身は出さんですよ。脂肪が濃いから。やっぱ腹壊したらいかんですから」

—あれ？ 鹿ってケーンって鳴くんですって？

「……（しばらく考えて）近くで聞くのと遠くで聞くのは、鹿はゼーンぜん違うですもんねえ。そばで聞くのはもう恐ろしいものです。ところが1キロも離れたところで聞くと、やさしい、声に聞こえる。キーの高い声。それと人が来たときに警戒して啼くのとまた全然ちがう」

—鳥なんかも違いますもんね。ビービー言うような声。

「そうそう。そいで鹿はたいがい3回啼くですもんね。連続して。そして今は植林を鹿が荒らすでしょう。だからネットをする。ネットにかかるのはオスのほうが多いわ。昔は鹿がこれだけ降りてくるっっちゃうことはなかったですね。畑とか人間が作る牧草とか、そういうのを食いくる。だから鹿が増える、繁殖率がよくなったというわけです」

—じゃあ発情期が変わってきているのもそういうのが……

「そうそう。それがある。うん。こんなに鹿が増えるなんて、僕らの小さい頃は想像できんかった。僕は昭和52年から猟を始めたっちゃけど、1シーズンに鹿を2頭しか獲れんかった。そして5、6年前までは5、6頭獲りよったけど。今はどんどん下のほうへ移動しよるですもんね」

—下、というツ瀬ダムの方ですか？

「そうそう。あそこは鹿は4、50年前まではほとんど見たことがなかった。ところが今はもうこの付近と変わらんと居るはずですよ」

—平成3年っていったら15、6年前ですけど、その頃はだいたいどれくらいとっていたんですか？

「うん……。鹿は……1シーズン20頭くらいかな」。

⑧内臓の臭いで食生活が分かる

「大きな青いミミズ。カンタロウ。あれ、猪が好きですもんね。蛇とか。猪は鹿を食べるからね。猪は、網にかかった（鹿を）食べるっです。……1週間前、長崎から来た人にそげん言うたら、猪は肉食じゃないから食べんというわけです。だけど、いや、食べる。猪の歯は動物を食べるような歯じゃないって言うけどね。かなり傷んだ肉も鹿だったら食うですもんね。したら、またその猪の内臓は臭くてもう全然食べれないです。もう内臓は捨てる。普通猪は捨てる所全然ないですもんね。爪以外は。内臓もぜんぶ整理して」

—内臓ってどうやって食べるんですか？

「一番いいのは胃袋、腸ですわね。あれ全部反対にひっくり返してキレイに洗ってそしてそれぞれあったけど、僕は今は食べんけど。ゆがいてそしてちょっと温めてコンロなんかに乗せてちょっとあぶって食べる。ほんのり、ドングリののような味わいがある」

—ちょっと弾力があるんですか？

「うん、ある。だから肥えたやつは脂肪も多いし、一回炊けばかなりおいしい。ちょっと臭うけどね。だけど最近のは猪もあんまり臭わない。内臓は。どういう関係かな。食生活が変わったのか……。鹿が全然臭わんですもんね。以前は鹿ったら臭くて内臓なんかとてもじゃなかったですわ。今んとは全然臭わんですわ。うん。鹿は青草が好物じゃけど奥山にはなかった。奥山にあったのが、山ダケ。竹じゃないけど、木じゃけどね。これくらいの赤い実がなるですわ。鹿はこれがものすごい好物ですわ。だけど最近の鹿はこれ食べん。だから内蔵割っても臭わん」

—あつ。食べたものが臭う……。

「ものすごい匂いが違いますからね」

⑨海の猪と山の猪

「宮崎やったら海岸のあたり、日南辺りの猪の肉は食べれんですよ。もう味が全然違う。海岸端のシシは爪が白いはずですよ。ほんとの山シシは爪が黒い。そして海のシシは爪のここへんに白い毛が残っとう」

⑩猟師が減った

「今日も講習（この日は猟銃の講習日）で言いよったですけど、鹿が増えてもう年々ですよ。猟師が減って

いくですわ。一番多いときは西都、この付近も入れて1万2、300人いたのが、今は4600人。猟師そんだけ減った」

——半分以下。

「うん。半分以下だからもう少し若い人に指導を進めてって話だったよ。でも警察は銃は多いのは喜ばんよ。銃が多いっちゃうことはそれだけ犯罪も多くなる。だからライフルなんか全然許可にならん。あれは4000メーターも行くですから。普通の散弾銃は200メーターくらいですから。全然違う」

⑪銃の扱いは慎重に

「宮崎県でも今年1人亡くなった。日南で。人を猪と間違えて。それから……あれはどこだったかな。1人は……（思い出しながら）、年配の人で頭が白かったっやないかな。それを鹿の尾って白いでしょ。それと間違えて、即死ですよ。だから……ベテランの人はそういうのを引き起こす。確認せんで撃つっちゃうのがね。ちょっと僕らには考えられない」

——気がせるんですかね？ “獲りたい”っていう。

「じゃ、な。ちょっと場所悪いとこで崖登って、ちょっと石の陰から猪の頭に見えたらしい。あっ！ っと思ったら（自分の腿を指差し？）ここに当たった事故もあった。去年頭撃たれた人は即死。とにかく、規則を守ることが大切。禁猟区と人家近くは絶対入らない。猟の時間を守る。山主へ必ず挨拶する。精一杯、考えて、事故を防ぐ」

⑫カクラ・セコ・マブシ

「そうじゃねえ。狩りをする人はみな狩りする場所を『○×のカクラ』とか呼ぶ。猪の通るところに、だいたいこう、マブシっちゃうて人間を配置するわけ。そして中に犬を連れて行くことを、セコね。今は無線機があるから、それでセコとマブシが連絡取り合う」

——無線機がない時代はどうしていたんですか？

「無線機がないときは、勘ですよ。犬声があがったら、ああ、犬が鳴きよるから、獲物はあっちと。獲る道に行けば、と」

——通り道は分かる？

「通り道は分かる。犬の鳴いた方向と地形で。あっち行くとだいたいあそこにといいことは想像できる」

——（想像できず）うーん。そうなんだ……

「それができんかったら、マブシはできない。そんか

わり、1回では出来んわけ。3回行きよったら、あっちの方向行った猪は今度はこっち行くな、と想像するわけ。昔は全部そうだった」

——昔は何人で？

「昔は仲間が5人ならセコは1人」

——お前あっち行けとかお前あっち行けとか、指示をしながら動く？

「そうそう。セコが一番分かるわけ。『あっちに行ったから、お前はあっちへ行け』とか。猪が引き返えしたら、『お前あっち行け』とか」

——すごい走る？

「走らんと駄目ですわ。猪ってものすごい早いから。だから。若い人の、セコの上手い人は、結局ヤマカンが分かってきたら、猪よっか早く行く人もおるよね」

——近道できる人もいるんですか！

「山に道がありよとです。慣れです。狩りというのは相当難しい。一番きついのがセコじゃね。セコは猪の寝床に行かんといかんから。山は慣れたら、あそこに行けば来るって、だいたい分かるわ」

——セコがリーダー？

「そう。犬は匂いでしたら行くけども、まず、居りそうな所に人間が付いて行かんとか犬は匂わんうちは分らんですから。匂いでしたら行くけど」

⑬廃墟の山小屋で見つけたもの

ある日の狩りの最中に、上米良さんは打ち捨てられた小屋を見つけた。中に入ってみると、誰かが暮らしていた形跡のある部屋だった。誰かがちょっと出ていって、そのままに帰ることがなかった、というような雰囲気。中のものはそのままになっていた。古い唐津焼の皿や今とは違うかなり年代物のビール瓶、松やにの入った小皿もあった。昔の人は体の具合が悪いときに松やにを舐めたという。山で働く人だったのだろうか、一体それが誰だったのか、今でも見当がつかない。このときばかりは狩りどころではなかった。皿や瓶は持ち帰り、今でも大切に保存している。

⑭釣りのスポット

一ツ瀬川とその支流は多くの瀬、淵があり魚の宝庫だった。近年の山林荒廃とダム開発によりそれらの瀬淵の多くが姿を消した。かろうじて残っている淵もあるが昔よりも随分と浅くなった。数は減ったとはいえ、川釣りの客は後を絶たない。地元の人には、釣り客が村

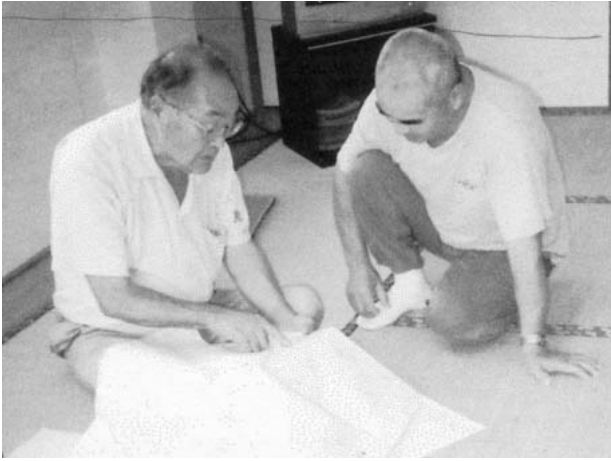


写真2 上米良さんと岡村さん

内の釣り場を詳細に把握しているので驚くことがあるという。たとえば魚の多い、ある谷がある。谷の上流は歩くこともままならない断崖であるため、地元の人には行かない。だが一般に出版されている釣りのガイドブックには、さらに上流の釣り場所とそこへの歩き方まで詳細に記されているという。おおよそ地元住民も知らないような情報である。

(4) 山と狩りについて (岡村春実さんと上米良安芳さん)

岡村春実さんには翌日にも再びお話をうかがった。上米良さんも同席した。今回は西米良にある巨木のこと、猪狩りの話、そして西米良のなかでも特に険しい市房山と江の口^{こうくち}近辺の山のことをうかがった(写真2)。

① 尾股のハコイデ

岡村さんは子供の頃、昔はハコイデで製材を搬出したという話を大人から聞いた。子供の頃の岡村さんの行動範囲はだいたい自宅のある事務所付近や小学校までだったが、その辺りでもハコイデの形跡はなかったという。トラック以前、そして竹内林業時代よりさらに昔の話のようだ。もう、この井手を知るじいさんたちはいないだろう。誰が作ったのかも分からない。同席した上米良さんも初めて聞く話だという。竹内林業以前の業者が、学校よりも下の方からさらに下流へ流し、須木村、小林市方面へと搬出したという。その後、業者が製材所や山もみんな竹内林業に売り渡したのではないか、とのことだった。

② 木炭自動車

岡村「うちあたりはトラックで椎葉から尾股へいきな

り連れてこられた。あの頃は木炭のトラックで」

——木炭車って軽トラくらい？

岡村「何が何が！ 4トンくらい。1.5メートルの筒。薪と5、6俵の木炭積んで。扇風機で起こして、エンジンかけて。多良木にバス会社があった。朝早く起きて木炭を起こす。運転手と助手がいた。夜中の2時3時に助手は木炭起こし。横谷峠は1人下ろし、2人下ろし、最後はみんなでバス押して歩いた。峠は登りきらん。泥道、山道で。そのことは自分もちいと覚えてる。下ろされて押してる大人に付いて行った」

上米良「九大演習林(隣の椎葉村)の車が一番よく通った。材出しというのもあったが、まあ、ヤミで食糧を手に入れるため。戦後の一番食い物のない時代。エンジンオイルもなかった。発電所で出た廃油をもらいうけた。本当は新品のときもあったけど廃油ということで、本当に物がなかったから。当時はかなりの人夫が木の伐採、植え付けなどをしていた」

③ 名残の大杉

外屋ヶ嶽(尾股の西南の山林)は崖。下側は全部タキ(けわしい崖)。ある程度上まで登らないと平地がない。だから造林も上しかししない。土がない岩ばかりの山。こまかい天然の木が植わってるだけ。木炭を焼いた時代に天然木を切ってハゲ山になった。清水産業は天然木の終わる前に植林を始めた。今の大きなスギはそのころ植えた小さな植林の木。昔の焼畑の跡に植えたもの。

樹齢80~90年の大きなスギもある。学校の上、外屋ヶ嶽のちょっと上、道路の上などにある。作業道を掘ってあるところに80年越したスギがある。学校のちょっと川下には何本もある。あれは焼畑の跡に植えたと思う。形からして本格的な造林の跡ではない。峠からずっと登って行って、マサタケさんの山の下に谷が入っている。その少し下のほうにも80年生のスギがある。釣り橋のある谷の上。立派なもの。車で行けるなら教えてあげるが、こんな雨で通行止めだから行けない。

村所でスギといえば、石内の上のほうに登ったところの谷端に50~60年生の大木が数本、立派に立っている。槇の口の方にもあったが切ってしまった。何十本も個人の持ち山で育っているものもある。三久保の児玉ミツマサさんのところにはかなり大きな夫婦杉がある。温泉(村営の温泉館「ゆた〜と」)の真向かい、中学校からも見える。今の旦那の曾祖父母が結婚記念に植えたもの。そういう夫婦杉は西米良にいくらでもある。

しかしあそこまで太いものはそうない。

④三久保のTVアンテナとジキサシの杉

上米良「昭和40年に三久保の奥にTVアンテナを立てた。共同アンテナ。それから5年間はアンテナ係をした。アンテナ係はちょっと故障したら山道をずーっと1時間半ばかり登っていかなきゃならない。大変じゃった。アンテナの電柱木は30キロくらい。一人1本。2人では無理。道が悪いから。アンテナ立てて、ケーブルにつないで引っ張って行く。200軒くらいがテレビを見れるようになった。10年くらいして山の持ち主の伐採出しのとき邪魔ということで小屋から上、夫婦スギから上の電信柱は1メートルくらい穴を掘って埋けた。アンテナまで5～600メートル」

岡村「うーん。とてもじゃなかったな。あの山道を登るのは」

上米良「若いときは下から1時間かかった。今は2、3時間かかるだろう」

岡村「アンテナのところ、農協長さんに頼まれて俺と親父と死んだしばじいとジキサシした。3人で共同請け。一人150本、挿さないと帰れない」

上米良「あれ、ようついつとったでしょ？」

岡村「あれ、ようつがとったなあ！今は途中まで行けるが先は無理。ジキサシっていうのは、木の枝、40センチ先だけ残して、下を綺麗に切って苗作る。案内棒っていうカネの棒、土に挿して、苗を押し込んで足でどンドン植える。朝早くから昼まで150本苗取り、昼から苗木をかろうて植えに行く。昔はそれくらい楽にしよう。みんな元気だったから。それに植え終わればいつ帰ってもいい。自分は中学卒業していくらもないくらいの子供だったから、終わったら飛んで帰った」

上米良「普通は平たいとこの畑で1、2年育ててから山に挿しに行く」

岡村「ジキザシは削っていきなり山に差し込む。あれは立派につがった山。温泉から見れる。今ちょうど45～6年前に植えたが、今はこげに（両手を広げ）太い。一人一日150本。全部で3000本。面積は1町まではいかないが広い。1カ月くらいかかった。あそこは下の登り口が悪かった。途中にある小屋まで行くのが大変だった」

⑤巨木のこと

岡村「神社はスギやイチイガシの大木がある。神社裏は今日はヒルがいるから行かない方がいい（この日は土砂降りの雨）。イチヨウは直径1メートルもある太さ。その前のイチヨウの株から出てる。その株は今のイチヨウの倍の太さ。昔そこに何かあったんだろうと思う。平瀬、縄瀬橋のちょっと上のほうにある。縄瀬の運動場の真向こうに見える。太い。前はもっとあったが今は2、3本。ケヤキはコオリヤマさんの山なんぼでもある。この辺りでは一番太いかもしれない。モミの木ならヤエコさんの山。高さが50メートルくらいのが何十本ってある。一度仕事で測量機で計ったことがある。まあ、直径が太い。有名なモミ。作業道が喰えているので、今は見に行けない」

⑥犬養い^{やしな}

岡村「犬の育て方はみんな違う。人それぞれ。耳の広い、尻尾左巻き、はせ方は家によって違う。うちはミルクとご飯を混ぜて食わす。あばら骨が張ってこないと太らない。あんまり食べ過ぎても吐く。一匹一匹の加減が大事。食べねば骨も太らない。猪を取るために使うから、とにかく太らかす。それから運動。運動と食べ方が大事。いっぱい走らせ、食べさせ。今のうちのソラも痩せこくれたが一気に太ってきた。同じ腹に産まれた仔犬を分け合っても、犬育てで俺に勝つ人はおらんじゃろうねえ。仔育ては。犬にかけては一生懸命する。今日も昼までうちの犬を山で走らせた。1時間くらい。親犬を連れて行けばもっと長くなる」

——よい犬の育つ確率は？

上米良「僕は50頭に1頭かな。3頭いた」

岡村「いや……うちあたりは（自分は）、100頭に1頭じゃと思う。50頭に1頭あれば最高。いい犬ほどすぐ死ぬ。何か月かで、あっという間に事故で死ぬ。だから次々犬の世代を重ねるように育てる。4、5頭あればいいけど、一番いい犬が死ぬと他の犬もコロっと駄目になる。25頭養ったとしても本当に働くのは5、6頭。サキ犬（リーダー犬）が欲しい。有名な犬の仔が欲しいが、ちゃんと引かないと全然駄目。親犬が引くといいい。山の中を親犬が行くところついていくから。どンドン引かないと駄目（引くという意味はどうやら山中で獲物をマークし追い詰めるやり方のようだ）」

上米良「いい犬は最高でも2、3年」

岡村「3年いれば有名になるくらい。めったにない。

悪い犬は働かないから長生きする。大事にしたい犬ほど死ぬ。今は洋犬と和犬が混ざっているの、もう地犬はいないだろう。改造した犬は足のすらっとして速い。足短いのは遅い。そして、つくばえないと駄目。猪に追い付き、噛み付き、留めおく、そういうことの出来る犬を作る。だがそれは犬にとってはとても危険なことなので、結局猪に切られて死ぬ。昔、俺の一番の名犬が猪に切られた。体を3カ所も。肺まで切られた。仲間と抱えて西都の獣医の連れてった。けれど運悪く獣医もその日狩りに行ってた。2、3時間待ってようやく帰ってきて手術。2カ所目縫っている最中に死んだ」

⑦独りで狩りに行く

岡村「江ノ口では誰も米良の人は狩らない。だれも。他人もくそも何もないようなとこ、真っ暗なうちから行った。獲れるたびに山の持ち主に肉をやった。山へ入らせてもらったお礼。初代に俺が一番猪を獲りよったときは、仲間と一緒にやった。それから独りで行くようになったが、そんな時は10匹くらいトラックに積んで行った。小学校1年生が並んでいくごと。ははははは。犬と俺、ずらずらずらず、並んで。みんな俺が山入ればびびった。他の組みと出くわすと、犬が喧嘩する。噛み合いになる。よその犬だからえらいこと。それが怖いから、この辺り（村所あたり）ではめったに狩らなかった。遠いところへ峠越して行きよった。獲れたときはいったん犬を連れて帰って、また人を雇って猪を出しに行く。まあ、狩りは若いときにすべきばい（笑）。この年になったらとてもじゃない。60歳まで一人で狩ったけど、40～50代が最高。俺はわりと年取ってから狩りを始めた。土居さんとこのじいさんから地犬の仔を分けてもらったのが最初。あの頃はまだ地犬がいた。40、50年前の話。昭和30～40年のころ。仕事から帰ってからも朝でも連れて行き、とっと（あっという間に）獲れた。それがきっかけ。地犬は足が短い。柴犬のような格好。あの頃はまるで洋犬はいなかった」

——昔の地犬だったら、いっぱいいた方がよかったですか？

岡村「いやいや。2、3匹おればいい。気が荒い。噛み付く。そのもらった犬が死んだ後は洋犬の血が入ってきた」

⑧猟師の目

上米良「狩りする人は、人の足跡、動物の足跡を見る

のが基本。爪の格好、重さ。見極められる人はちゃんと跡を覚えられる。獲った猪がさっき見た足跡の猪かどうか、そこまで見る。もし違えばもう一匹いるのは間違いない。だから一頭仕留めたらすぐもう一頭を追う。アセった所（猪がエサを食んだ形跡のあるところ）は必ずチェック。あきらめない。道路端で見つけた猪の足跡が、どちらから来てどこへ行ったか。左か、右か。右だったらあの寝床じゃないか。そこへセコは行く。猟師の基本。爪の大きさで体重の検討はつく」

⑨狩猟免許

上米良「鉄砲は取得が厳しい。若いうちならいいが、年取ればなお取得は難しい。取得の試験には鳥の判別がある。これが難しい。たとえば鴨は色々種類があるし違いもごくわずか。ここらではめったに見ない種類もある。鳥の絵を20枚くらい次々見せられ、パッと答えなきゃならない。あれが難しい。それから距離の目測。弾がどこまで先に飛んでいくか見極める。これも難しい。講習を完全にやればまず60点は取れるだろう」

⑩シシ肉は高級品

——魚や猪があったから、昔は外から肉を買わなかった？

上米良「うーん。1キロ6000円もするものを買うのも難しいんじゃないかな。猪買って食べられる人はよほど経済事情のよい人。豚や牛なら半値で買える」

——昔からキロ6000円？

上米良「昔は1斤600gでやりとりしていた。1斤3000円。昭和30年ごろまではそうだろう。だから土地の人で買う人はいなかっただろう」

⑪危険な江ノ口の山

上米良「記憶にあるかぎり、4、5人の余所者が寒川の三財のところまで亡くなっている。外屋ヶ嶽あたりは道に迷うことで有名。地元の人でも道に迷い恐ろしくなっていて、狩りをやめた人が幾人かいる。ものすごい険しい。錯覚を起こす。同じような場所が何度もある。僕たちは初めて入る山では必ず柴を折ったり木を折る。タランと下がるように。宮崎や西都の人にとって江ノ口は有名な狩場。獲物も多い。岡村さんは江ノ口によく狩りに行ったですよ。僕は江ノ口行ったことない」

⑫八合目からは絶対に上がるな

岡村「峠を人は間違えやすい。ここが峠じゃない（両手で三角の山の形をつくり、そのてっぺんを強調）。ここじゃけど、ここじゃあない。頂上が広いほど人間には分からん。頂上が5、10メートルほどの広さなら分かる。広いダイラが危ない。人間が迷うところはそこ。方向、錯覚を起こす。素人の狩り者に俺は教える。八合目から絶対に上がるなって」

——ええー！　そうなんですか。

岡村「そうですよ。絶対上がるなよ。あがれば二度とこっちへは帰れんぞとなるぞ、って。『あらあ、だいぶんこっからずいぶんまだあるねえ』ちゅうとこから絶対上がるな。八合目からはこうして（人差し指を水平に半円を描く。頂上ではなく迂回して）上がれ」

上米良「そうそう」

⑬江の口の遭難者

岡村「そういうので峠を登りきって道を誤って死んだ人がおった。余所の人。25年か30年前のこと。外屋ヶ嶽で仲間と狩りをしたあと、一人別れて須木村の方へ出ようとした。したら、余所者じゃから道はよく知らない。だから峠まで登り切って、錯覚起こして反対側に降りて、そのまま道路の終点まで降りてきた。そっちは須木村の反対、江の口ですよ。そっで、大きな川が道路の終点から下へ流れている。下ればそっちに家があるだろう。そう思って本人は下っていったら、日が沈んで周りは真っ黒闇。川はどんどん深くなる。もっと大きくなる。最初は泳いでジグザグに渡って行ったのだろう。弾は銃につばとつたらしいよ。砂に銃をつっこんだまま。そこから大分下って。（おそらく）泳いで。岩の下にいて。寒いわなあ。じっとしゃがんで。食糧も背負うたまま。遭難したって分かり、警察と人が大勢出て山狩り。人間は先見つけた。でも警察は人間よか銃が怖いわな。銃が出るまでさらに山狩り。外屋ヶ嶽から降りてくる時に、〇×の親父はその人に出くわしてた」

——ああ、遭難する前に人に出くわしてた……。

岡村「うん。雪のじらじら降る中、降りてくるのを見た。〇×さんたちはそのとき仕事。『お前どっから来た？』『外屋ヶ嶽から。須木村へ行く』って。須木村は反対だから〇×さんも『お前なんでこっちきた？　こっちは外屋ヶ嶽の下ですよ』って、そんな話したらしい。

人間、分からないときはなんぼビンタ（頭）も関係ない。俺思った。何で道路の終点から下ったのか。俺はそれを考える。なんで？　そこにじっとしてれば、毎日、こっちの人が仕事でその道路の終点まで来るとやから……。こうした（手で壁を作るようにして）山ですよ。そこでぷつと道路が切れてたら、そこから先に行くより、来た道戻ったほうがいいと人間思うはずじゃがねえ」

——……ええと、つまり、遭難した人は、まず頂上で方向を見失ってまったく反対側へ降りてきてしまった。そして、そこはもう道路が終点だったのに、その先の山道が下りで川も流れていた。そこでさらに錯覚をおこした。下ればやがて人家のあるふもとへ行くだろうと……。

岡村「ですよ。けれども道路はその前に家があるから、そこまで造ってる。道路が終点ちゅうことは、もうその先に道も家もないということ。その意味を取りきれば、死んでもよかったわけじゃ。サエダニの終点から横野の峠まで2キロあるなしです（横野は江の口の東隣）の。峠から横野の灯は見えるよ。そこで道を尋ねればなあ」

上米良「ああ、あの終点に来た？　あそこまで来ていれば……」

岡村「うん。もう、すぐじゃわ。家があれば電話でも何でも通じる。〇×のじいもプロじゃと思うから余計なこと言わなかった」

上米良「分かると思って、その人もあんまり尋ねることなかったんじゃないかな」

岡村「そう思う。ちょっと聞けばいい。『おじさん、ここ道が切れよっちゃんが、この先家あるかな？』『何が何とぞ、ワレ、そっちいったら何もないとぞ。（横野峠のほうへ）上がるんなら車乗せていくぞ』とかなあ。教えるわなあ。その差じゃったと……思うがなあ……。狩りで米良で死んだのはあれが最後」

⑭市房山・トビノモトも険しい

市房山で一昨年、沢登りの観光客が事故で亡くなった。場所が悪かったのでヘリコプターで遺体を引き上げた。大字上米良のトビノモトでも25年前、東京の学生2人が事故にあった。1人がやっと沢を登り切り、ああ、登ったと思ったら、つかんでいた木が枯れ木でばさっと落ちた。翌日発電所にもう1人が助けを求めて来た。

上米良「あその滝壺は地元の人でも亡くなったな」

岡村「ああ。あそこの平地のところ、山女がものすげえおったな。行き詰ってたところが、そん、ツボ（滝壺）じゃったな」

上米良「(苦笑いしながら)……あの(トビノモト?)谷のおっくも広いでな、場所が悪い、悪い。5年前、滝のずうっと上で。あそこで知り合いが独りで18貫(約70キロ)のシシを獲った。こんな石が(両手を広げ)いーっぱい。登りもどうしようない。狸に食われぬよう、水に沈めて降りてきた。僕も加勢して朝早くみんなまで登って。これは大変なことじゃった」

岡村「あんたは猪はもらえるけど、かなり、やっばいとなるなあ……」

上米良「3人で分配。かついで降りてきた。もう、場所が悪い」

岡村「降りるたって、自分ひとりがやっとなりるとこじゃろ？」

上米良「もう谷は石ばっかり。その間をくぐっていかんとどうにもならない。どうもならんところ。たまに大きな淵もあってな」

岡村「あそこは8合目まで伐ってあるな。ブナかなんかあったでしょ？」

上米良「ああ、針葉樹のものすごい木があった」

⑮山は乗り越えていくのが楽しい

上米良「昭和46年頃、一ツ瀬発電所の同僚が市房山に登りたいということで市房山の尾根伝いに矢立原へ歩いた。途中まで行ったら、『いや、上米良さん、もう降りたい』ちゅうて(笑)。降りるといってもそこから降りる方が大変なのに。そのまま行ったほうが楽なのに。しょうがない。トビノモトの真向かい、植林したところを目指して降りた。途中でよう歩かんとが出てきて……。 (ほとほと困った顔で) やっと、連れて帰った(3人とも大笑い)」

岡村「いやあ、山では、俺たち(山育ち)はみんな元氣だけだなあ」

上米良「そっで、クマザサが立っとなって、2、3メートル先は全然分からんちゃから」

岡村「クマザサはもう、全然見えんちゃからな。人間ちゅうとは向こう側見えんところが一番山じゃ駄目じゃつとよ」

上米良「じゃ、じゃ(そう、そう、の意)。あんとき苦労した」

——市房はそんなに険しい。

上米良「険しい。一つ間違うたら大変。山というのは険しいけど、乗り越えていくっちゃが楽しい。僕たちは子供のころから歩いてる。40歳くらいまではものすごい速かった。1時間で4キロ歩くのがふつうだが、僕は45分で歩いた」

⑯心の中の神様

岡村「神様はみんなに、心のなかには絶対ある。俺にもあるよ。でもあの神様、拝んだからっていったって俺には何もしてくれないよ。何もくれん。自分が働きながらこうする(両手を合わせて頭を垂れるしぐさ)とが神様。俺そう思う。上米良さんは上米良さんの神さまもとるよ」

上米良「心の中に、いつもね、思うのが神様。だから必ず……色々考えるでしょ。まず一つのこと実行していいのか悪いのか。こっち行ったら親は喜ぶか。子は喜ぶか。喜ばんことは絶対しない。常に僕は考える。他人よりか自分のうちのものに迷惑かけること絶対したくない……それが神の心かなって常に思っとる」

岡村「俺はホントの神様ぜったいおらんで言い切る。ホントに見えたら、俺、神様捕まえて持ってくるもんなあ(みんな大爆笑)」

上米良「持って帰って犬以上に可愛がるわ(笑)」

岡村「俺でっちゃ、これが神様の意味かって、何回かあった。あらっ!? ちゅう時はある。でもこの年になっても神様見たときはない。俺の神様。こげんに立派な神様よ。ニカニカ笑ってみんなと付き合うから。だから俺の神様、いつもニカニカして、こげんに(両手をフワっと大きく広げ)立派な神様よね」

(5) 中武の組の狩り

猪の猟解禁は11月15日から2月15日まで。解禁日の3日後、中武忠征さんの組が猪を仕留めたという。解体の見学をさせてもらおうと中武家に向かった。中武家の小屋には、中武さん親子と狩りのメンバーである工藤さんと岡村さんがいた(写真3)。中はいい匂いでいっぱい。大きな真っ黒い釜で猪肉の煮込み、酒盛りの真っ最中だった。猪は午前中に解体を終えていた。犬は6匹、あちらこちらにたむろしていた。

①本日の獲物

18日夕方、若猪のオスを獲る。50キロ(12貫)。牙や体に縄をかけて、谷筋を40~50分かけて引きずって降



写真3 中武の組のメンバー（左：中武忠征さん 中央：岡村春実さん 右：工藤さん）

ろした。山奥であれば1時間半かけて降ろすこともある。毛を焼いて皮をはがし、内臓を抜く。それから解体する。隅々まで使い切る。残すところはない。内臓は湯がいて大根を合わせ醤油と砂糖で煮込む。中武さんの息子がもう一人の青年と獲った。解体は父（忠征）がやった。慣れていれば2、3時間。素人なら半日かかる。魚の開きを作るときと一緒に慣れば早い。

②猪はダイヤ

やはり鹿よりも猪。猪がダイヤなら鹿は石ころ。みんな猪になると気違いになる。鹿でも誰かが必死になるとまわりの仲間も目の色は変わるけど。海のことは知らんけど、海の漁師も一緒と思う。やっぱマグロとアジならマグロに気違いになるんじゃないか。猟の最中は、犬も荒くなるが人間も荒々しい。「おい、なんすつとか！ 走れ！」「はよ、向こうさ回れ！」とか、怒鳴り合い。年上とか年下、仕事場の先輩後輩、全然関係ない。丁寧な言葉を使う場合じゃない。自然の命を獲るのだから真剣。相撲の力士のように瞬間的な馬力が必要。ブッシュマンってあったよね？ 猟をする原住民。あれ見てホントあんな感じと思う。俺なんか、頭の毛ないけど鬣（タテガミ）が立つような気持ちじゃ（笑）。それが、猪獲れて、鍋を囲んで酒を飲めばニカニカ笑って和やかになる。これがまたいい。

③ずっこけながら犬を追う

犬を放すと後を追っかける。山をずっこけながら走っていく。マーカー（犬の首に付ける集音マイク）で生で犬の声が聞こえる。尾根の上からだとワーワーやってる犬の声がマーカーなしでも聞こえて、猪の位置がわかる。犬が仕留める前に位置確認をしなければなら

ない。犬は仕留めるとキャンとも言わず、山を降りてきてしまう。そうするともう仕留めた猪の場所がわからない。無駄骨を折ることになるので、必死で追っかけていく。犬が噛み止めた猪を、犬の隙間から人間が刺して仕留める。

④犬たち

今回の狩の組には5匹の犬がいる。犬の順はシロ（9才）、マル、バツ（5才）、そして若いボケ（1才）とソラ（2才?）。最年長でリーダーのシロは外で静かに座っていた。おとなしく足取りも年寄りのようだが、狩りでは闘争心が爆発。猪に突っ込んでいく。これまで2回牙で切られた。シロが飼い主の工藤さんに連れてこられると、他の犬たちは尻尾を振ってシロへ寄っていた。マルとバツは小屋の中に入り込み骨をせがむが、若い2匹は入ってこない。マルとバツは同じ腹から生まれた兄弟。マルが次期リーダー。バツは横腹に毛染めの染料で大きくバツテンが書かれている。似ているので区別するため。仲間も最近やっとなりがわかるようになってきた。耳の形がちょっと違う。

一番良い犬をハナイヌという。最近のハナ犬は？ と問うた。するとみんなが次々と「やっぱブルジャな」「ああ、ブルジャ」「あれはいい犬じゃった」と昨年猪に切られて死んだ犬の名を挙げた。度胸のある犬はそれだけ命を落とす可能性が高い。理想はリーダーを頂点に8・6・4・2歳という隙間のない年齢構成が理想。犬は良くもって5年。猪に牙で切られる危険も高い。一匹死んでも持つ年齢構成があればまだ安心。工藤さんのシロも来年あたりで引退。その後は宮崎市内の工藤家で静かに暮らす予定。

犬をつくるのが大事。昔じいさんが「一犬、二足、三鉄砲」「犬がよければ小学生でも猪が獲れる」と言っていた。親犬が良ければ仔も良くなる。獲れることを知ればどんどん良い犬になる。みんな犬は子供のように可愛いがる。猪と戦えと仕込むくせに、殺されれば「お前なしてそげん馬鹿をするか」と嘆く。ブルは去年牙で腹を切られ、ハラワタが1メートルも出るほどの大怪我。ハラワタを引きずれば枯葉やゴミが付くので腕にグルグル巻き、犬はリュックに背負って山を降りた。すると腕のハラワタが段々冷たくなった。結局死んでしまった。すばらしい、いい犬だった。



写真4 岩崎の組のメンバー



写真5 岩崎の組の犬たち

⑤犬の名前の付け方

狩りは一瞬で何でも判断する。犬にも呼びやすい名前をつける。良い名前はヤマ、タキ（タダユキの略）、タカ、ジョン、ココ、ドク（クドウの逆）など。昔の名犬の名を継がせることもある。だが名前負けするのかあまり良い犬にならない。マル、バツ、イチ、ニ、サン、シロ、クロ、ボケ、ブルなど。唯一長い名前はインディアン。獣医で薬を出される時、薬袋に「工藤三ちゃん」とか「工藤ボケちゃん」とか書いてあるとき、ちょっと恥ずかしい。

(6) 岩崎の組の猪狩り

上米良さんは昭和53年に狩りを始めた。椎葉村の妹の息子たち、つまり甥っ子たちに誘われた。仕事が終わってから、夜勤明けもいとわず狩りに出かけた。ワンシーズンで猪を110頭獲ったこともあった。このグループを仮に岩崎の組、と呼ぶこととしたい。この岩崎の組は甥の岩崎兄弟、彼らの従兄弟たち、そして上米良さんである（写真4）。上米良さんや岡村さんから狩りの話を聞いたが、実際の猟の様子を想像することは難しかった。そこで岩崎の組にお願いし、2日間狩りを見学させていただいた。

①1日目（2月11日）

狩りは日の出から日の入りまでが規則である。まだ薄暗い時刻、上米良さんの軽トラックで出発。待ち合わせ場所へ向かった。まもなく上米良さんの甥である康道・八郎さん兄弟が軽トラに犬を積んでやってきた。犬たちは左右に並んで並び、檻から頭を突き出している。トラックの揺れに合わせてブランブランと犬たちの首が揺れる。道路端の草の臭いを嗅ぎ、猪や鹿の気配を探しているのだという。全員揃ったところで狩場Aへと向かった。狩場へ向かう車中、無線に「鹿が出て

きた」という声が聞こえた。突然、前方を走る岩崎兄弟の軽トラの犬たちがけたたましい声で鳴き始めた。先ほどまで順序よく並んでいた犬たちが、グルグルと回りながら騒いでいる。車も急停止。銃を胸の前に持った八郎さんがヒタヒタと小走りに前方へ走っていく。犬たちは耳をピンと立てて八郎さんを目で追っている。2発ほど銃声が聞こえた。同時に左側の造林の中、3、4頭の鹿がすつとんで逃げていった。

【1番目の狩場A】

最初の狩り場Aはゆるやかな谷。まずは谷上の山道の陰Bにセコである岩崎兄弟と上米良さんが待機。犬たちもいる。マブシである義人さん、浩一さんは別の地点でアセリ場所を確認し、それをトランシーバーで康道さんに伝える。康道さんはその様子を聞き、もっといいような場所を示唆する。

康道「□□の下んとこ、通つとや？」

義人「ああ、はいはい」

康道「〇〇さんとっからもうちいと上さ登って、××に向かっていつもある道の上は？」

義人「××のとこ、あせつとつたようじゃ」

といった具合。このようなやりとりが7、8回ほどあった。30分ほどこのような感じで待つ。次第に犬たちがじれてくる。檻のなかでギューン、ギューン、ワンワン、キャンキャン、あらゆる声でじれる。どらどら！待て待て！と岩崎兄弟がなだめる。少し落ち着くが、またじれ始める。今日の犬たちはタケ・クリ・アキ・タロウ・キム・タク・コジロウ・シロの8頭（写真5）。このうち6頭がマーカーをつけている。マーカーとは首輪に付けられた集音マイクのことで、無線機にその音が入る仕組み。犬の様子を無線機で確認できる。狩りの最中、マーカーは様々な音を拾っていた。ハハハと息をする犬が、息遣いをやめて黙っている様子（何かの気配を察している）、走ったために喉奥で



写真6 猪と犬を待つマブシ（上米良さん）

カカカカと鳴る激しい息遣い、イタチか何かの小動物を捕まえ、その動物がギュウギュウと鳴く声、川を渡る足音、その川の水をピチャピチャ舐める様子、アスファルトを歩くコツコツという足音、そして獲物を追うけたたましい吠え。そんなマーカ―の音と遠い山から聞こえる犬の声、そしてその周辺の猪の寝床や通り道、アセリ場所からセコとマブシは猪の位置を追って行く。

浩一「えらいごとあせっちゃったね」

康道「道下？」

浩一「も、一番の寝床にいる」

という声が入り、康道さんたちの声もキビキビしはじめた。狩りが始まる。岩崎兄弟と上米良さんはそれぞれトラックを急発進。上米良さんはB地点の谷向かいC地点へ移動。C地点は日が当たって暖かい道路。追い上げられた猪がCに登ってくる可能性も高い。道端には獣道がついている。静かに立っていると向かいの山でワンワンと鳴く声が聞こえた。

マーカ―に無線機の番号をあわせると、ドッドカドッドカと走る犬の足音が聞こえる。何かを追っている。この間にも、セコの康道さんは、マブシの義人さんと浩平さんのいる場所がまるで見えるかのよう指示を出す。「まちっと（もう少し）下ると吐き合いがある。そこを〇×メーター行け」など。山から聞こえる犬の声、マーカ―の犬と人の声に耳を傾けつつ、上米良さんが小さな声で、見えないセコと犬たちの動きを教えてください。さきほど待機していた山の斜面をつつきるように犬たちが走っていること、そして猪がいる可能性が一番高いウジの場所。近くで犬の鳴き声がする時はさっとレーザーの音を消す。犬のいる正確な方向を確認するためだ。C地点に猛スピードで義人さんのトラックが駆け下りてきた。義人さんは車から降りると



写真7 獲れた鹿と犬

わたしたちから少し離れた場所に立つ。片手にレーザーを持ち、黙って山を見上げている。

レーザーに息を上げた康道さん（あるいは八郎さん？）の音が入った。ザッザと枯れ木を掻き分け走る足音も聞こえる。猪を2頭、谷口へと追っているという、C地点から見下ろせるはずだが一面雑木や薄に隠れて分からない。犬たちの声がどんどん近づいてくる。キーの高い激しい犬の鳴き声。Bに近づいてきた。上米良さんがギリギリまで銃に装弾しない。暴発や何かのミスで発砲することが何よりも危険。自分も仲間も怪我をする。慌てず、犬とレーザーの音を見極め、速やかに装填する（写真6）。このとき「銃を構えたら絶対に自分の背中につくように」と私を背後に下らせた。これは2日間の狩りの間必ずそう言われた。そして遠くで銃声が数発聞こえ、しばらくして音がやみ、あたりが静かになった。やがてピーホロローという犬寄せの笛が聞こえた。猪は逃げてしまったらしい。小さな猪だったとのことだった。笛を聞いて集まった犬を回収し、次の狩場へ。このとき一頭でも犬が迷子になれば、見つかるまで探す。

【2番目の狩場へ移動】

移動中はあちこちのアセリ場をチェックする。あまりアセった様子がない。同じマブシで40分ほど待つ。すると別の地点で鹿を仕留めたという連絡が入る。現場へ行くと鹿はトラックの上に乗っていた。1頭の犬（今日のリーダー犬？）が鹿の傷跡をずっと舐めている（写真7）。本当は噛り付きたいところだが、怒られるのでせめて血を舐めている。他の犬たちは檻の中で休んでいる。この後、昼ごはんを食べ、早々に次の狩場へ。日没までおこなった。この日の獲物は鹿が1頭だった。



写真8 鹿の解体作業

②鹿の解体

夕方岩崎家へ到着。十数頭の他の犬が待っていた。岩崎家では猟犬を大切にしている。狩りを引退した犬や狩りに使えない犬であっても、死ぬまで面倒を見る。自然と頭数も増えていった。上米良さんより「噛むことは絶対ないが、念のためあまり手を差し出さないように」と言われた。

すぐに鹿の解体が始まった。翌日はみな仕事がある。急がなければならない。まずは作業小屋の前に角にロープを括り付け、鹿を吊るす。腹を割り、内臓の部分を取り出す。八郎さんが胃袋を見せてくれた。胃袋に張り巡らされた白いレース状の脂肪はフランス料理に使われるという。また前足の付け根は関節がない。筋肉だけで動くのだ、と前足を動かして見せてくれた。首の部分の皮を剥ぐ。背中を割って、首下から横腹の皮を一気に剥がす。背骨の左右に付く肉を首筋から尻まできれいに切り取る。前足の一番つま先に近い関節を割り、ヒヅメの部分を取り取る。そうして前足の付け根上から一気に皮を剥がす。その後前足の肘も切り取る。後ろ足はそのまま残し、肉を切り取っていく。そのときバランスがよいように両足を持つ人がいる(写真8)。

ここまで30分かからなかったように思う。スケッチ、メモを十分取る暇もない早さだった。4人は入れ替わり立ち代わり作業をこなす。切り取った肉の塊を作業小屋のテーブルへ運ぶ。こちらでもどんと作業が進む(写真9)。何頭かの犬たちも周りに寄ってくる。仔犬が鹿の足元に溜まった血を舐める。引退した以前のリーダー犬も盛んに吠え、作業を見ている。作業小屋では塊を細かくする。この作業も30分かからなかったように思う。

作業終了後、奥さんたちが食事の用意をしてくれた。



写真9 肉を切り分ける



写真11 バーナーで毛を焼く(上米良さん撮影)

大きなアルミのヤカン一杯に焼酎を入れ、湯を沸かすようにコンロにかける。今日獲れた鹿の刺身も食べさせてくれた。塩で食べると旨い。以前獲れた猪のバーベキュー。小腸・大腸・胃袋・レバーも食べさせてもらった。レバーは豚のそれよりもコクと旨味が深い。

「都会の人たちは分からないが、自分たちにとって猪の肉はステーキよりも美味しい。一番のご馳走だ」と八郎さん。猪の肉と焼酎と一緒に食することによって、それぞれの味の良さが一層深くなる(写真10)。

③2日目(2月16日)

猪狩り解禁の最終日である。この日はD、E、Fが狩場となった。午前中の狩場はDだった。上米良さんは4回ほどマブシの場所を変えた。それぞれの場所で30分から40分ほど待つ。この日は風もなく太陽も出ていたが、ミズレ交じり、氷雨の降るなかでのマブシもある。爪先までずぶ濡れになり、ガタガタ震えながら待つ。たとえ獲物がとれなさそうな雰囲気であっても、思わぬタイミングで猪が現れることもある。それもまた狩りの面白さだという。あるマブシの地点で、山仕事の人と行き会った。山を眺めながら上米良さんはその人と立ち話。今日は〇〇の山には〇さんが仕事で入って

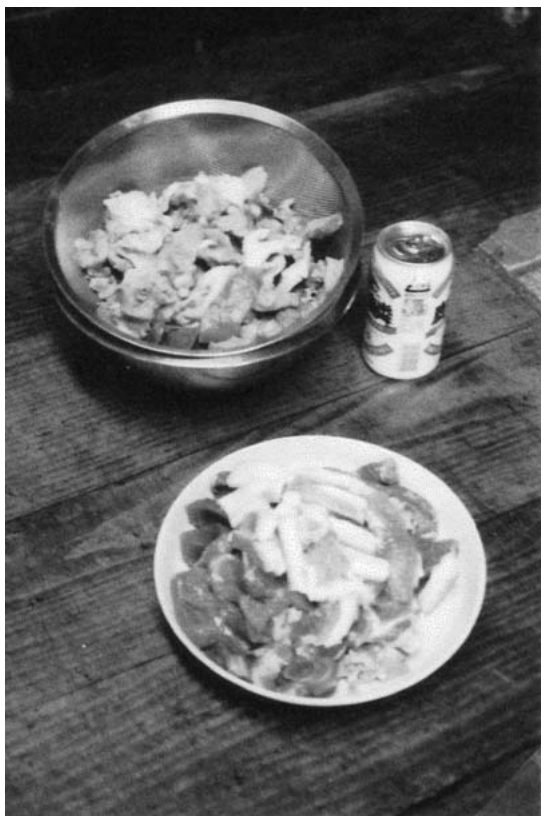


写真10 猪の内臓（上）と肉（下）

いる。△のところで△さんが狩りに来ていた。まだ獲れていないらしい。といった立ち話をする。何気ないようだが、これも狩りの情報交換のようだ。狩りではたいてい午前中に勝負が決まるといふ。獲れる時は日の出すぐから獲れる。その勢いによって午後にも勝負する。狩りは人も犬も体力の消耗が激しい。犬も昼を過ぎると段々だれてくる。この日の午前中は猪の気配なし。昼食となる。犬たちは檻の中で大きなイビキを立てて仮眠を取る。昼食くらいはのんびり取るものと思っていたが、食べてお茶を一杯飲み、すぐに別の狩場Eへ向かう。

狩場Eでは初めてセコと犬が山を行く光景を見た。道路端を覗けば崖のように深い斜面である。八郎さんと犬たちはその崖をスラスラと降りていく。尻尾を振る犬に囲まれた八郎さんはあっという間に造林の向こうへと姿を消した。この後、狩場Fに移動し、日没ギリギリまでおこなったがこの日の獲物はなかった。帰りの車中、無線機に「今日は駄目やった！ 残念会の用意しとって！」と自宅へ連絡を入れる声が聞こえた。八郎さんはしきりと「悔しい。悔しい。また来年来て。今度は絶対獲るから」と言ってくれた。

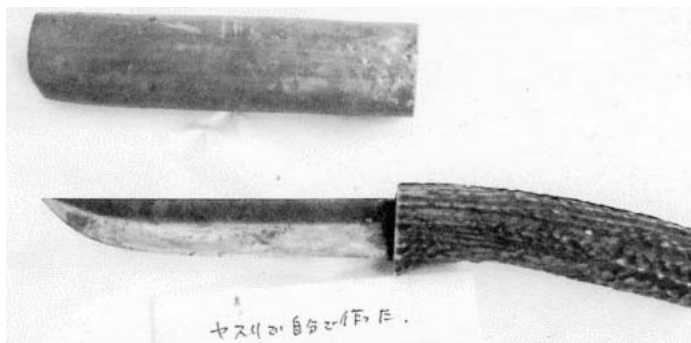


写真12 ヤスリから作った包丁



写真13 日本刀から作った包丁

④狩りに使う刃物

後日、上米良さんが昔狩りに使った刃物を8本見せてくれた。6本は上米良の手作り。ヤスリに電動グラインダーをかけて作った。包丁の刃の反対側にはヤスリの目が残っている。鹿の角で柄を作った（写真12）。グラインダーはやりすぎると高温になり、カネが溶けてナマテツになる。ナマになった刃では解体中に骨に当たって潰れてしまう。水をかけながら少しずつ擦っていく。だから時間はかなりかかる。一日仕事。包丁の根元を水道の根元の器具で抑えたものもある。要らないものは必ず取っておく。何に使えるか、じっと考える。長年の習慣だ。

柄や包丁の蓋も自分で作る。最初に柄にする木を一度割って中を彫る。そして接着する。包丁の刃を止めるの釘も手作り。蓋のホウの木。こちらも一日仕事。全部で2日かかる。写真13は古い日本刀の先で作った。

Ⅱ 西米良村の地名 (大字、小字、通称地名)

今回の調査では大字村所、竹原、上米良の通称地名の聞き取りをおこなった。上米良、村所地区は上米良安芳氏、村所の尾股地区は岡村春実、土居栄太郎氏、竹原地区は浜砂廣氏より聞き取りをおこなった。

調査の際には西米良教育委員会編『ふるさと探訪』を

参考とした。この本は小学校教材の副読本として出版された。昭和53年当時健在だった明治20～30年代生まれの人々から各大字の地名について聞き取りをおこなっている。さらに一つ瀬ダムに沈んだ横野地区の地名と明治～昭和初期の家屋見取り図も記載されている。西米良の人々の暮らしを語る貴重な一冊である。また、宮崎県発行の西米良村森林基本図には、聞き取りでは確認できなかった数多くの谷や山の地名が記されている。これらの情報をあわせて表1～5を作成した。

表の頭には●・○・▲の記号を附した。●は今回の聞き取りで確認した地名、○は森林基本図に記載されているが調査では未確認の地名、▲は『ふるさと探訪』で確認した地名である。表の項目「内容」では『ふるさと探訪』を『ふ』と簡略表記した。

なお、これらの地名地図として地図2～8を作成した。竹原、村所中心地は地図2、3、村全体は地図4～7である。小字境界は地図情報が読みづらくなるため省略した。

表1 大字板屋

聞	地名	よみがな	内容	小字
○	笹山谷	ささやまだに	猿渡谷との境	大尾（だいお）
○	相谷	そうだに？		
○	八重	はえ		
			聞き取り地名なし	猿渡谷（さるわたりだに）
○	黒仁田	くろにた		黒仁田（くろにた）
○	黒仁田谷	くろにただに		
○	ガガツ谷	ががつだに		
○	黒仁田	くろにた	標高1106.8mの山頂	
●	〔伊勢社領の山〕	〔いせしゃりょうのやま〕	もともとは個人所有の山だったが、昭和40年頃伊勢社のものとなった。	
			聞き取り地名なし	野下（のした）
○	お大師堂	おたいしどう	横谷トンネル脇にある堂。	横谷（よこたに）
○	鉾元	ほこもと	山頂。1096.71m。横谷の山頂の尾根筋にある。この尾根筋は小字吉村との境。	
●	一里山峠	いちりやまとうげ	村図より	
○	吐合	はきあい	黒仁田との小字境	
○	塚谷	つかたに	板谷川へ落ちる谷	
○	荒谷	あらたに		
●	〔工事済みの道路〕	こうじずみのどうろ	国有林と伊勢社領山の間。地図上は谷筋のみだが、現在は道がついているようだ。	
○	柵之橋	つがのはし		
○	柵ノ木谷	つがのきだに		
●	〔国有林〕	こくゆうりん	もともとは個人所有の山だったが、昭和40年頃営林署へ売却された。	
○	ゴンサク谷	ごんさくだに		
○	横谷	よこだに	山頂。1167.59m。	
○	横谷川	よこだにがわ		
○	横谷橋	よこだにばし		
○	横谷	よこだに	集落	
○	板屋川	いたやがわ		
○	吊橋	つりはし		木之口（きのくち）
○	国道217号線	こくどう217ごうせん		
			聞き取り地名なし	山瀬（やませ）
○	エビラ谷	えびらだに		児平（こびら）
○	下板屋	しもいたや		
			聞き取り地名なし	池之元（いけのもと）
○	日向平	ひなたびら？	平地に田畑	吉村（よしむら）
○	オヤブ谷	おやぶだに	谷筋に田	宇戸谷（うとだに）
○	上板屋	かみいたや		
○	御大師橋	おたいしばし	隣の小字無田野との境の川にかかる橋	
○	オセブ谷	おせぶだに	隣の小字小椎尾との境となる谷筋	
○	カンチ谷	かんちだに		小椎尾（こじお）
			聞き取り地名なし	八重（はえ）
○	鶴瀬	つるせ		鶴瀬（つるせ）
○	板屋橋	いたやばし		
			聞き取り地名なし	熊田元（くまだのもと） 無田野（むたの）
○	オコバ谷	おこばだに	オコバとは「大畑」のことか？	大王鶴（だいおうづる）
○	秋切峠	あききりとうげ？		折戸（おりと）
○	簷橋	ろはし？		
○	植木橋	うえきばし		
○	上桁橋	かみけたばし？		
○	折戸橋	おりとばし		
○	コクト谷	こくとだに		
●	〔山崩れ地〕	やまくずれち	台風14号により山が崩れた	

2. 大字上米良

聞	地名	よみがな	内容	小字
●	猪ノ津久呂	いのつくろ	槇ノ口発電所より下流一帯をさす地名。ツクロは米良の方言で懐のこと。	猪ノ津久呂 (いのつくろ)
●	〔旧九電社宅〕	きゅうきゅうでんしゃたく		
●	椀の木淵	かばのき	猪ノ津久呂橋よりやや上流にある淵。	
●	イマビヨウ	いまびょう	人家が数軒あったが、河川工事などのため上手へ移動。現在では今人家のある場所がイマビヨウと呼ばれている。『ふ』では京都から来た僧都の寺跡とされる。この僧都は大変な法力で経を唱えて拍手を打ち、大杉を倒して川を渡ったという。	
●	ジロソコ淵	じろそこぶち	西南戦争の頃、ここで村民の一人が薩軍に処刑された。官軍を湯山峠まで道案内したためといわれる。	
▲	ばか淵	ばかふち	場所未確認。『ふ』に地名のみ記載。 ※上流よりジロソコ淵→ばか淵→山下淵→淵中岩の順。	
▲	山下淵	やましたふち	場所未確認。『ふ』に地名のみ記載。	
▲	淵中岩	ふちなかいわ	場所未確認。『ふ』に地名のみ記載。	
▲	兜の巢	かぶとのす	昔、武将が兜を脱いで休んだ場所とされる。	
●	村堂	そんどう		
	寺の谷	てらのたに	モトヤマ神社、薬師堂の間にある谷。	植田 (うえだ)
○	田之出川原谷	たのでかわらだに		
○	槇ノ口	まきのくち		
○	一ツ瀬川	ひとつせがわ		
▲	風呂の谷	ふろのたに	場所未確認。『ふ』によれば昔風呂の湯が出た場所。	罎 (かこい)
○	罎橋	かこいばし		
○	米良橋	めらばし		
○	笠瀬	うけせ		樽浦 (だるうら)
○	荒口	あらくち		
○	津賀瀬谷	つがせだに		
○	米良川	めらがわ		
○	村野	むらの	標高863.4mの山頂。	
			聞き取り地名なし	仁畝ノ谷 (にせのたに)
				吹野 (ふきの)
	市房山	いちふさやま	九州山地の主峰としてしられる。米良三名山の一つ。曙つつじで有名だが、非常に険しい山として知られている。	槇之口 (まきのくち)
○	槇之口谷	まきのくちだに		
●	裏谷	うらだに		
○	百間ノ滝谷	ひゃっけんのたきだに	200mに渡り数段の滝がある。登山愛好家に良く知られた滝。	
○	山ノ口谷	やまのくちだに		
○	境谷	さかいだに	椎葉村との境。	
○	三階谷	みしなだに (?)		
○	田出ノ川原	たでのかわら		
	槇の口発電所	まきのくちはつでんしょ		
○	カナスビ	かなすび	九電上米良ダム下、左岸。秋茄子が冬まで育ったことがあることから寒茄子と呼ばれたという(『ふ』)。	
●	〔王子製紙の山〕	おうじせいしのやま	松之尾に隣接する椎葉村内の山林。	松之尾 (まつのお)
●	境谷	さかいだに		
○	山下	やました		
○	山下谷	やましただに		
○	トビノモト	とびのもと		
○	ヤマンカ	やまんか	出来のよい焼畑があった。『ふ』によれば、京都東本願寺の山門や本堂にヤマンカから搬出した用材が用いられているという。またヤマンカは山神のこと。	
○	松之尾	松之尾	標高1023.45mの山頂。	
○	トビノモト橋	とびのものはし		
○	石堂山	いしどうやま	標高1547.35mの山。米良三名山の一つ。曙つつじの名所。	
○	寺谷	てらたに		
○	上米良線	かんめらせん		
○	上米良線校橋	かんめらこうはし		
○	上米良	かんめら		
●	モトヤマ神社	もとやまじんじゃ	平家の氏神を勧請したものとされる。本殿は1574年に建立。	
●	罎	かこい		
●	薬師堂	やくしどう	280年前に建立された(『ふ』)。	
▲	人形がへぐり	にんぎょうがへぐり	場所未確認。『ふ』には水難逃れを願って人形を流した淵という伝承が記載されている。	
○	石堂谷	いしどうだに		

表3 大字竹原

間	地名	よみがな	内容	小字
●	〔山津波跡〕	やまつなみあと	天神池よりやや上手の山肌が、江戸時代の終わりごろ、崩れたという伝承がある。	元米良（もとめら）
●	天神山	てんじんやま	米良荘を治めた米良一族の初代重次が入山し、元米良に在した。ある夜裏山に不思議な光を見る。これを天神の化身として護り神として祀ったという伝承がある（『ふ』）。	
●	天神池	てんじんいけ	川原に出来た小さな池。『ふ』によれば、この水が濁れば不幸がおこるとされている。	
●	天神さま	てんじんさま	かつては天神池よりやや下流に祀っていたが、大正15年に春ノ平公園へ移された。	
●	たいら淵	たいらぶち	井戸内橋より500m上流、こたたきの向かい側にある淵。昭和の初め、竹ノ尾に折尾製材所があった。ここで働いていた平という人が、山仕事の帰りに足を滑らせて水死したことから付いたと言われる。現在は飛び石で渡れるが、槇ノ口発電所が出来る前は水量の多い瀬だった（『ふ』）。	赤保後（あかほこ）
●	もみの木淵	もみのきぶち		津賀瀬（つがせ）
●	里道	りどう	もみの木淵より100mほど上流。今の道より山側についていた。	
●	こたたき	こたたき	米良ではキツツキをコタタキと呼ぶ（『ふ』）。協力一致田を開墾していた頃、この瀬のあたりで測量者は縄をつけて測量した。	
▲	鬼神淵	きじんぶち？	所在地未確認。竹原公民館より約1km上流、津賀瀬橋の下。淵の形が横に深く、鬼神が住むという言われがあった（『ふ』）。	
●	〔釣り橋跡〕	つりばしあと		春ノ平（はるのひら）
●	一致橋	いちちばし		
●	世間淵	せけんぶち		
●	〔協力一致田取水口〕	きょうりよくいっちでんしゅすいぐち	釣り橋跡のやや下手から協力一致田の水を引いた。	
●	協力一致田	きょうりよくいっちでん	昔は仲間田と呼ばれていた。明治43年から昭和2年まで18年かけて開墾した竹原の共同田。天保年間の飢饉の教訓をいかし、米の増産を目指した。	
●	はんの瀬	はんのせ	春の瀬がなまってハンの瀬という（『ふ』）。	
○	春ノ平公園	はるのひらこうえん	協力一致田とあわせて大正15年から昭和2年にかけて作られた。共同記念碑建ち天神さまも祀られている。昭和5年ごろには公会堂や茶工場もあった（『ふ』）。	
●	天神さま	てんじんさま		
●	せけん淵	せけんぶち		
●	松煙小屋	しゅえんごや	明治時代に松の根を焚いて煤を出し、墨の原料を作る人がいた。その作業場の跡といわれている。（『ふ』）	
●	財内の墓	ざいうちのはか	20～30分ほど歩かないと分らない。	
○	天包山	てんぼうざん	標高1188、82mの山。別名アマツツミ。米良三名山の一つ。	
○	尾春谷	おはるだに		
●	村有林	そんゆうりん		尾春（おはる）
●	尾春	おはる	竹原地区の山作場所。小屋（後には隠居小屋）が数軒あった。竹原から尾春への山道は馬が通れた。峠を越えたあたりから“おーい！”と叫ぶと、先に尾春へ着いた人がお茶をわかし始めたという。また、こうもり岩、ぼうず岩、西南戦争の戦没者の墓、財内の墓、松煙小屋も尾春周辺にある。	
●	ぼうず岩	ぼうずいわ	天包山への登山道にある岩。西南戦争の鉄砲の弾跡が残る。	
●	こうもり岩	こうもりいわ	または天の岩屋という。洞窟もある（『ふ』）	
●	〔西南戦争の墓〕	せいなんせんそうのはか	西南戦争の戦没者の墓。	
	かめ谷	かめたに	『ふ』によれば井戸内谷の小さな谷の途中にある滝壺。形が小さな壺、あるいは亀に似ているという。	井戸内（いどうち）
○	井戸内谷	いどうちだに		
▲	鉄砲堰	てっぽうせき	所在地未確認。265号線より井戸内谷に入り約1km。井戸内バス停近くにあった製材所が水車を使っていた。水量が少ない時、夜間に水を貯めるためだったダム（『ふ』）。	
○	山下橋	やましたばし		
○	井戸内	いどうち		
○	井戸内橋	いどうちばし		
○	吐合橋	はきあいばし		長藪（ながやぶ）
○	三方塚	さんぼうつか		
●	山のお伊勢	やまのおいせ	三兄弟の伝説。昔「財内左近、ようく形部、山のお伊勢」という三兄弟がいた。彼らは山の中腹にそれぞれ家を構えた。財内とようくの名はそのまま地名として残った。山のお伊勢は黒木直樹氏山小屋の地点に墓があった。文明六年と記されており、建立者は浜砂外三名となっている。近年になって八幡神社の一の鳥居側へ移された（『ふ』）。	
	井戸内林道	いどうちりんどう		
●	セコ谷	せこだに	セコとはかりこ坊主のこと。かりこ坊主は山の神の化身、あるいは河童。夜人が通るとホイホイと鳴き、木を倒したり山仕事の人々を驚かす（『ふ』）。	
○	岩屋谷	いわやだに		
○	井戸内峠	いどうちとうげ		
●	ようく形部の墓	ようくぎょうぶのはか	林篤氏山小屋のあたり（『ふ』）	

聞	地名	よみがな	内容	小字
●	とやが嶽	とやがたけ	米良荘を治めた米良一族の初代重次が入山し、元米良に在した。ある夜裏山に不思議な光を見る。これを天神の化身として護り神として祀ったという伝承がある(『ふ』)。	長藪(ながやぶ)
●	[旧棚田]	きゅうたなだ	今は一枚だけ。5～50rほど。	一番ノクボ(いちばんのくぼ)
●	こだるまた谷	こだるまただに	枯谷	
●	鷹神さま	たかがみさま	かつて竹原は鷹原であったという。鷹の巣が7つあり“七つ村”とも言われていたという。その鷹の神様を祀ったもの。昔イチョウの木に巣を作っていたがその木が枯れてしまった。その場所に2つの石塚を作ったという。	
●	庚申さま	こうしんさま		
●	耳神さま	みみがみさま	黒木京子家前にある。50cmほどの石塚。盆と正月に花をあげる慣わしがある。	
○	久保谷橋	くぼたにばし		
	筏場	いかだば	一致橋の下流。釣り橋跡のところ。昔は淵だったが近年砂利で埋まってしまった。釣り橋をかける前は丸太の一本橋だった。川が増水するたびに流されていたので、その備えとして筏を置いていた(『ふ』)。	竹之尾(たけのお)
●	檜の木淵	かしのきぶち	檜の木がたくさん繁っていた(『ふ』)。	
●	芋洗い淵	いもあらいぶち	淵の上流が岩場になっており、川の水音が芋を洗うような音をたてた(『ふ』)。	
●	射弓場	しゃきゅうじょう	『ふ』によれば火縄銃の練習場。年に一回ここで競技がおこなわれた。	
●	きんのきやぼ		「桐の木やぼ」のことだが、実際に桐が生えていた記憶はない(浜砂廣さん談)。『ふ』によれば、廣さんの父武彦さん(明治31年生)の話として、焼畑の一角に桐の木の植林があったことを記している。やぼとは焼畑のこと。	
●	観音さま	かんのんさま		
●	ごんしりやじ		公民館より200mほど上。カライモ(薩摩芋)が良く取れた焼畑跡。面積は小さい。『ふ』によれば権四郎という人が住んでいたという。やじは屋地のことだという。	
●	墓	はか	照山院殿とキワを祭った堂。射弓場そばにあったが、川沿へ移動。	
●	旧那須家	きゅうなすけ		
●	三共山	みともやま		
●	村有林	そんゆうりん		児佐江(こざえ)
●	椎葉谷	しいばだに	よく山崩れが起きる斜面。大きな棚田があった。	椎葉(しいば)
●	[兜出土地]	かぶとしゅつどち	昭和2年、協力一致田を開墾中に兜鉢、馬具類が出土。帝国博物館に寄贈された。元米良の共同墓地より約30m斜め上(『ふ』)。	
●	[山くずれ跡]	やまくずれあと	ハンの瀬の向かい側。台風や大雨で頻繁に崩れる山の斜面。	
●	よきの淵	よきのふち	淵の側に大石があり大水の度に渦が起り流されてきた枝木が寄ったところ。また材木の川流しをした頃、材木もこの淵に集まってきたという(『ふ』)。うづ原の下。	
●	馬洗い淵	うまあらいぶち	昔馬を洗っていた淵(『ふ』)。	
●	うづ原	うづはら	竹原中心地よりやや下手にある数軒と棚田のあたりを“うづ原”という。昔は中心地の人は「ちょっとうづ原に行って来る」というような言い方をした。『ふ』によれば、昔春ノ平が大きな山津波を起こし、一つ瀬川をせき止めて大きな渦巻きを起こし、水流の流れ出た処を“うづ原”。シバが寄った処を“椎葉”と言うようになったという。	

表4 大字小川

聞	地名	よみがな	内容	小字	
○	アサヤブ谷	あさやぶだに		麻藪 (あさやぶ)	
○	麻藪橋	あさやぶばし			
○	松原	まつはら?			
	聞き取り地名なし			鮎川原 (あゆがわら)	
				井出ノ谷 (いでのたに)	
○	ダイジウゴヤ谷	だいじうごやだに		猪ノ戸 (いのと)	
○	岩井谷	いわいだに		岩屋之内 (いわやのうち)	
	聞き取り地名なし			尾藪 (おやぶ)	
○	折立橋	おりたてばし		折立 (おりたて)	
○	猪ノ戸	いのと	標高839. 38mの山頂。		
○	古屋敷	ふるやしき			
○	小川	おがわ			
○	ハシカケ谷	はしかけたに		木浦 (きうら)	
	蛇淵	じゃぶち	柳田国男「うるし兄弟」の舞台。		
○	橋架谷橋	はしかけだにばし		鷺ノ巢 (さぎのす)	
○	赤髭山	あかひげやま	標高951. 63mの山頂。		
○	ミツシノ山	みつしのやま			
	聞き取り地名なし			沢水 (そうず)	
○	下原	しもはら?		下原 (しもばら)	
	聞き取り地名なし			四郎屋敷 (しろうやしき)	
				須賀飛留 (すがひる)	
○	流合	?		鈴原 (すずはら)	
○	鷹ノ巢八重	たかのすばえ		鷹ノ巢 (たかのす)	
○	入部ハギ谷	いりべはぎだに			
○	コバル谷	こばるだに		鳥居之元 (とりいのもと)	
○	カラ谷	からたに			
○	中入	なかいれ			
○	中ノ橋	なかのはし			
○	木浦助八重	きうらすけばえ			
○	提原	さげはら			
○	杖立峠	つえたてとうげ			
○	烏帽子塚	えぼしづか			
	聞き取り地名なし				中水流 (なかつる)
○	小川谷	おがわだに	字境		仁田之花 (にたのはな)
○	日平越	ひびらごし		日平 (ひびら)	
○	日平	ひびらごし			
○	木浦	きうら			
○	山ノ口谷	やまのくちだに			
○	布水滝	ほすいだき	全長75m以上の大滝。観光名所。	武之木 (ぶのき)	
○	ブノキ谷	ぶのきだに		古川 (ふるかわ)	
○	コユノ谷	こゆのだに			
○	ニノ谷	にのたに?			
○	一ノ谷	いちのたに			
○	吐合	はきあい		古屋敷 (ふるやしき)	
○	吐合橋	はきあいばし			
○	吐ノ合橋	はきのあいばし			
○	古屋敷橋	ふるやしきばし			

表5 大字村所

聞	地名	よみがな	内容	小字
	村所発電所	むらしょはつでんしょ		
▲	松太郎淵	まつたろうぶち	発電所前、一ツ瀬川と板屋川の吐合の淵。『ふ』によれば、松太郎という人が鮎かけの最中に帽子を流されて深水にはまったことが謂れ。子供の水遊び場だったという。	大王（だいおう）
▲	蛇淵	じゃぶち	一ツ瀬川、発電所の放水路のあたり。『ふ』によれば昔蛇が住んでいた。それをみた身重の女性が石になったという。	
●	コダイオウ	こだいおう	社	
●	〔山津波跡〕	やまくずれあと	昭和46年におこった山津波の場所。	
●	宮ノ瀬	みやのせ		
●	ベツトウ谷	べつとうだに	漢字は別登谷。谷頭に飲料水の取水口がある。	
○	村所	むらしょ		鶴（つる）
○	八幡神社	はちまんじんじゃ	15世紀、懐良親王が創建した伝説あり。以降550年にわたって神楽が受け継がれたとされる。夜神楽で知られる。	
●	百人橋	ひやくにんばし	現在の村所橋よりやや上流にあった。	
●	村所橋	むらしょばし		
●	八幡轟	はちまんとどろ	一ツ瀬川。昔から深い瀬。今なお深い。『ふ』には別名御手洗淵とある。	
●	宮ノ瀬	みやのせ		
○	田ノ元橋	たのもとばし		
●	〔萱切場〕	かやきりば	2町ほどの広さだった。『ふ』には田無瀬の野と呼ばれていたようだ。萱葺きの萱を伐っていた。昔は小学校の子供の遠足場。一本松があり、村所が一望できた。現在はテレビ塔が立つ。	
○	ムギシ谷	むぎしだに		
▲	カジ野藪谷	かじのやぶだに	ムギシ谷の西側の谷（『ふ』）。	
●	クズノ瀬	くずのせ		田無瀬（たむぜ）
	田無瀬	たむせ	昔はタブ瀬と呼ばれていたという。昔ある人がタブを持って魚すくい（にぎりすくい）に行ったところ、木彫りの像がかかった。そのためタブ瀬と呼ばれるようになったという。別名山の神瀬とも呼ばれていた（『ふ』）。	
▲	おんじょ池	おんじょいけ	昔、おじいさんが入水したという池（『ふ』）。	
▲	ごぜがたんぼ	ごぜがたんぼ	昔、おばあさんが入水したところ（『ふ』）。	
▲	クエの瀬	くえのせ	三久保バス停前。80年ほど前に山崩れを起こした。川の流れがせき止められ、村所が全戸水に浸かったという。その後クエの瀬と呼ばれた。道はなかなか復元できず土砂の上を往来したため、馬車や車力が苦勞したという。現在でも落下した岩が残っている（『ふ』）。	
▲	鶉の越	うのこし	西米良中学校上の山の峠（?）。ここで大きなタブをもって飛んでくる鶉を捕まえたと（『ふ』）。	
▲	新城峠	あらきとうげ	鶉の越よりさらに上の方にある峠（『ふ』）。	
▲	地鎮塚	じちんづか	明治初期に新城峠の西側に大きな地割れができた。子供ではまがごとくできないような幅だった。地割れの下には鶴村があり危険だった。黒木市松という神主（黒木敏則氏の曾祖父）がお祓いをした。大豆を黒くなるまで煎り上げ、その大豆が芽を出すまで山崩れしないよう祈願し塚を立てた。新城峠より40mほど下った場所にある（『ふ』）。	
●	トヤンシタ	とやんした	児玉龍輔氏の山小屋近辺をトヤンシタといった。ここに霧がかかれば雨が降る。翌日の仕事もトヤンシタの様子を見て決めたという（『ふ』）。	
●	船場	ふなば	一ツ瀬川の岸。百軒橋の時代、洪水の度に橋が流されるので渡し舟が往来していた。その船着場。小学校の上級生の水遊び場でもあった。夫婦石という岩もあった（『ふ』）。	
●	シモノカワ	しものかわ	一ツ瀬川の淵。穏やかな水流なので、昔から子どもの遊び場。	
●	丸淵	まるぶち	一ツ瀬川の淵。下の川より100mほど下流。昔は深い淵だったが現在は浅くなっている（『ふ』）。	
▲	鍋石	なべいし	『ふ』に地名あり。一ツ瀬川沿いと思われるが場所未確認。	広瀬（ひろせ）？
▲	面突き岩屋	おもつきいわや		
▲	双子	ふたご	『ふ』によれば、村所より1.3km下流。川が二股に分かれていた。またここの大岩が二つに割れたことからこの名がついたという。	
○	サベイシ谷	さべいしだに	一ツ瀬川へ落ちる谷。	広瀬（ひろせ）
○	ヒロセ谷	ひろせだに	一ツ瀬川へ落ちる谷。	
○	平瀬	ひらせ		
○	サイ谷	さいだに	狭ノ重との小字境	
○	金山谷	かなやまだに	谷の上流でアンモニア採掘が行われていた。鉱石はダチ馬で小川道に運び上げた。キンマで村所へ運び、西都へは馬車で運んだ。精錬所は宮崎にあり、永峰伊作という人が経営していた（『ふ』）。	砥山谷（かなやまだに）
●	〔神社〕	じんじゃ		
○	金山谷	かなやまだに		

聞	地名	よみがな	内容	小字
○	金山橋	かなやまばし		砥山谷 (かなやまだに)
○	サカイ谷	さかいだに	亀谷との小字境	古川 (ふるかわ)
○	古川	ふるかわ	標高854.75メートル。広瀬との小字境。	
○	轟八重	とどろがはえ		小山重 (おばえ)
○	亀石谷	かめいしだに		
○	縄瀬谷	のうぜだに		中ノ藪 (なかのやぶ)
○	中之藪	なかのやぶ		
○	ヤマノサレ谷	やまのされだに		狭上 (さえ)
○	スケ谷	すけだに	亀谷との小字境。	狭ノ重 (さえ)
○	タカノス谷	たかのすだに		永山重 (ながされ)
○	中小屋谷	なかごやだに		
○	内中橋	うちなかばし		崩ノ平 (くえのひら)
○	山中橋	やまなかばし		
●	〔崩壊道路〕	ほうかいどうろ	2004年の台風被害により山の斜面が崩壊した。	山中 (やまなか)
○	山中谷	やまなかだに		
○	長峯谷	ながみねだに		長峯 (ながみね)
○	縄瀬	のうぜ		
○	縄瀬橋	のうぜばし		縄瀬 (のうぜ)
●	オチヨ淵	おちよぶち	昔、オチヨという女性が身投げをしたと言われる淵。現在は鹿や動物の通り道になっている。	
●	尾股峠	おまたとうげ	昭和に入ってから、竹内林業が板屋・横野方面への用材搬出路のために掘削した。	
○	コシ岩谷	こしいわだに		
○	河鹿橋	かじかばし		
○	小椎葉橋	こしいばばし		
○	永久橋	えいきゅうばし		
○	大曲橋	おおまがりばし		
○	シグキサ谷	しぐきさだに		
○	清水橋	しみずばし		
○	サカヘ谷	さかへだに		笹尾 (ささお)
○	尾股川	おまたがわ		
○	高岳	たかだけ	標高992.92メートル。熊本県多良木町との県境。	
●	〔多良木町への道〕	たらぎまちへのみち	大きな谷筋に道がついている。久多良木へ出るときに道。	
○	高嶽橋	たかだけばし		
●	ツプロ	つぷろ		
○	第二高嶽橋	だいにたかだけばし		
○	ゲタヤニ谷	げたやにばし		
○	明日待橋	あすまちばし		
○	小谷橋	こたにばし		
○	清流橋 (吊り)	せいりゅうばし		
○	カキノ木谷	かきのきだに		
○	第三工場	だいさんこうじょう	製材所跡	尾股 (おまた)
○	第四工場	だいよんこうじょう	製材所をつくるために整地はされていたが実際には操業していなかった。	
○	尾股橋	おまたばし		
○	桑ノ木谷	くわのきだに	笹尾との小字境	
○	藤治尾橋	ふじおばし		
○	溪流橋	けいりゅうばし		
●	〔竹藪〕	たけやぶ	墓地の付近。尾股には竹藪が少なかった。生活に必要な竹細工を作るため、ここで竹を切りシリナシまで運んだ。	小野 (この)
●	〔墓地〕	ぼち	墓石が自然石であるため、現在は所在が不明。溪流橋手前の山の斜面のあたりにあったようだ。	
○	チョウサン谷	ちょうさんだに		
○	入野	いりの	標高955.1メートル。狭上・永山重・笹尾との小字境	
●	アシガル谷	あしがるだに	大きな谷。“アスカリ”とも言う。獵師が“明日狩ろう”と言ったことから付いたとされる。	
●	〔大杉〕	おおすぎ	アシガル谷上の尾根沿いにつ。	
●	サエ道	さえみち	隣の地区サエへ行く山道。途中に山の神が祭られている。	外屋ヶ嶽 (とやがたけ)
●	シリナシ谷	しりなしだに	谷口は尾股中心地だった。	
●	マルハチ谷	まるはちだに	シリナシ谷より右に分かれる谷。	
●	〔製材所跡地〕	せいざいしょあとち	シリナシ谷とマルハチ谷の分かれ目の平地にある。マルハチ製材所の跡地か?	
●	〔シリナシ谷の畑〕	しりなしだにの はたけ	シリナシ谷の奥に住む住民たちの畑。ヒエ・アワ・ムギなどを作った。かつてはここだけが開けて明かった。	
●	〔貯木ダム〕	ちよぼくだむ	シリナシ谷へ下ろした材を一時的に集めたところ。	

聞	地名	よみがな	内容	小字
●	〔キンマ道〕	きんまみち	シリナシ谷から第一工場へ向かって作られた搬出路。ここだけではなくかつては尾股のいたるところにキンマ道が作られていた。	外屋ヶ嶽（とやがたけ）
○	志利那志橋	しりなしばし		
●	清水産業の事務所	しみずさんぎょうのじむしょ	現在の尾股にある人家はこの一軒のみ。無人。	
●	竹内氏の記念碑	たけうちしのきねんひ	竹内氏の業績をたたえる記念塔。	
●	第一工場	だいいちこうじょう	製材所跡。	
○	尾股川	おまたばわ		
○	尾股	おまた		
○	尾股小中学校	おまたしょうちゅうがっこう		
●	〔大杉〕	おおすぎ	小中学校の裏手に樹齢80年ほどの杉の大木が何本かある。焼畑のあとではないだろうか。	
●	〔たけ〕	たけ	志利那志橋から小中学校までの山は崖〔たけ〕になっている。	
○	トドロ谷	とどろだに		
○	ジンゾウ谷	じんぞうだに		
○	イケスノ谷	いけすのたに		
○	村所山	むらしょやま	標高146.78メートル。源治小屋との小字境。	
○	熊小屋谷	くまごやだに		
●	ハコ井手	はこいで	尾股川の川筋に作られたようだが、明確な場所は不明。竹内林業以前の業者が南の須木村方面への搬出ルートとしていたらしい。詳細は不明。	
○	上子谷	じょうしだに？	標高1061.6メートル。須木村との村境。	
○	アトムクリ谷	あどむくりだに		
○	イノ谷	いのだに		
○	スノ谷	すのだに		
○	ナガレゴヤ谷	ながれごやだに	イノ・スノ谷と合流する。	
○	一里八重	いちりばえ	標高1086.66メートル。源治小屋との小字境	

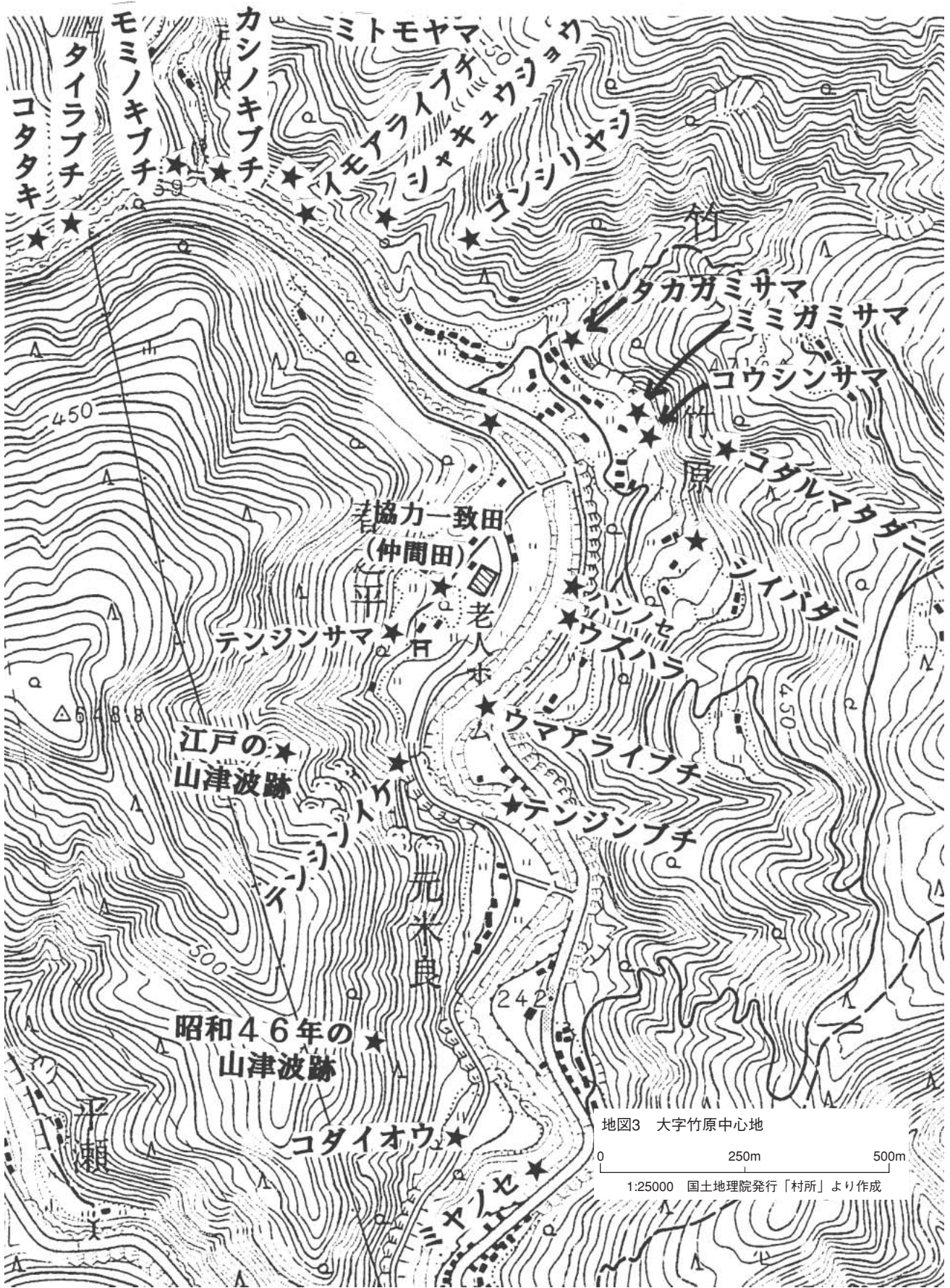
表6 大字小川

聞	地名	よみがな	内容	小字
▲	おも高	おもたか	田爪キヨ氏水田の下のほう (『ふ』)	ダム水没地
▲	ばじょ池	ばじょいけ	昔、ばば様が入水したとされる池。今の橋のたもと、石櫃側から少しサエ谷に行く道のあたりにあった (『ふ』)。	
▲	長瀬	ながせ	田爪重盛方の下の方から田爪辰男氏方までずっと長い瀬があった (『ふ』)。	未確認
▲	石櫃	いしびつ	昔、鬼が住んでいた。畳6枚分もある大きな宝物の入った櫃を担いで住処を移そうとしたが、オモタカで夜が明けてしまった。人目を恐れて鬼は櫃を置いて逃げてしまった (『ふ』)。	
▲	助五郎	すけごろう	谷の名前。かつては山小屋があり、田畑や柿・桃・柚子の木の老木が残っている (『ふ』)。	
▲	むくじが谷	むくちがだに	助五郎から分かれる谷 (『ふ』)	
▲	咲山	さきやま	昔は猿山と呼ばれ、崎山と呼ばれていたが、昭和38年にダム水没のため新しいバス停を作る際、「咲山」と名を変えた (『ふ』)。	
▲	おて切り	おてぎり	なが瀬に入り込むところ (『ふ』)。	
▲	おだまり淵	おだまりぶち	おて切りの下の方 (『ふ』)。	
▲	そく瀬	そくぜ	昔の横野の学校 (亀谷) の下あたり (『ふ』)。	
▲	たけの瀬	たけのせ	そく瀬の上の方は瀬が竹の節ようになっていたので竹の瀬とっていた (『ふ』)。	
▲	貴智さまの墓	かんちさまのはか	上米良哲氏の田の傍らに「元禄16年末天空西福寺五世恵岳貴智記室」と刻まれた墓がある。明治6年の祖母の話では、昔、修行の途中の貴智が上米良家の介抱を受けた。貴智は「墓に水をやってほしい。その水を子供の出来物の薬にしてほしい」と言って死んだ。その祖母は、二合カンビンにカケヒの水を入れて、哲氏を伴い貴智の墓参りへ行き、その水を出来物につけてくれたという (『ふ』)。	
○	下谷	しもたに	亀谷との小字境山村江	(やまむらえ)
▲	行者堂	ぎょうじゃどう	旧道天包山の山越えの途中にある堂。菊池家家臣佐藤家が代々熊野権現で修行をした。行者堂は小川での修行場。古い石碑があったが風化したため昭和52年に新しい碑が建てられた (『ふ』)。	麻藪 (あさやぶ)
▲	岩つぼ	いわつぼ	小川資料館の北側の小さな谷。水量は少ないが冷たい。小川城の飲料水としてもちいられたとされる。谷の周りには沢山の竹が植わっていた。	囲 (かこい)
▲	猪ば様	ちよばさま?	岩つぼの下流の岩陰に祀られた神様。古老の話では昔は一日がかりで猪ば様のお祭りをした。今では米良神社のお祭りのときにお参りをしている。幣が30本も立てられている (『ふ』)。	
▲	釈迦堂	しゃかどう	釈迦堂西福寺のあったところ。寺跡は何も残っていないが周囲には十数基の墓が立つ。戦没者の慰霊碑がある。明治の廃仏稀釈の頃、西米良村は神道へ改宗したが、その前時代の名残を示すものである。	沢水 (そうず)
▲	御池の淵	みいけのふち	米良神社拝殿の側にある。米良神社の祭神磐長姫が入水したという伝承がある (『ふ』)。	
▲	クワンジン岩屋	くわんじんいわや	クワンジンとは浮浪者のこと。県道沿いの大きな岩屋によくクワンジンが寝泊りしていた。	下三財 (しもさんざい)
▲	筏場	いかだば	筏場の淵とも呼ばれた。	
▲	さだえ淵	さだえぶち		
○	大谷	おおたに		石櫃 (いしびつ)
○	亀谷	かめたに	標高805.93メートルの山頂。	亀谷 (かめたに)
○	狭谷	さえだに		
○	狭谷	せまだに?		源治小屋 (げんじごや)
○	亀谷橋	かめたにばし?		
○	クサギヤボ谷	くさぎやぼだに		
○	ドノシ谷	どのしだに		
○	ハナスギ谷	はなすぎだに		
○	三賊川	さんぞくがわ	小山ノ尾との小字境。森林基本図では三賊だが、地形図、聞き取りでは江の口となっている。	
○	クサキヤボ谷	くさきやぼだに		
○	小洞内	?	標高1223.35mの山頂。	
○	浅藪	あさやぶ	標高1065.73mの山頂。	
○	スヌケ谷	すぬけだに	三財川へそそぐ谷	内之畑 (うちのはた)
○	シリナシ谷	しりなしだに		
○	ノヂノタケ谷	のぢのたけだに		
○	河口	こうのくち		
○	大木場	おおこば?	標高590.35mの山頂。	
○	石塚	いしづか		
○	内畑橋	うちはたばし		
○	内畑	うちはた		
○	ムクチ谷	むくちだに		
○	甚五郎谷	じんごろうだに		

聞	地名	よみがな	内容	小字
○	甚五郎橋	じんごろうばし		内之畑（うちのはた）
○	サブロシ谷	さぶろしだに		小山ノ尾（こやまのお）
○	狭上稲荷神社	さえいなりじんじゃ		
○	三財川	さんざいがわ？		
○	ニエ谷	にえだに		
○	香山	かやま？	標高約940メートルの山頂。	
○	横野	よこの		大河内（おおかわち）
○	横野大橋	よこのおおはし		
○	サカイ谷	さかいだに		
○	野地	のち		岩爪（いわつめ）
○	一ツ瀬ダム	ひとつせだむ	昭和38年に建設された。高さ130m、堤長416m、九州最大のアーチ式ダム。これにより一ツ瀬川は横の口・村所・一ツ瀬・杉安・大河内の5つの発電所が形成された。総出力22万1500kW、九州有数の水力発電地帯となった。	

表7 大字越野尾

聞	地名	よみがな	内容	小字
▲	世見淵	せけんぶち	小川と越野尾の境、4、5mの深さのある淵。昔は上の方が深れば小川が世間よし、下の方が深ければ越野尾が世間よしと言われた（『ふ』）。	未確認
▲	〔西南戦争の戦場跡〕	せいなんせんそうのせんじょうあと	元共有原野と河野充良氏所有の山。山中には戦いの跡や砲台の跡などがあつた。この後薩摩軍は小川の天包へ退却、その後横谷峠を越えて鹿児島へ敗走した（『ふ』）。	
▲	下水流	?	水没前にあつた小川川の川筋地名。詳細は不明。上流より下水流→出縄→長江→今別府→浜古勢→久保→共同墓地→隠淵（『ふ』）。	ダム水没地
▲	出縄	でなわ		
▲	長江	ながえ		
▲	今別府	いまべふ?		
▲	浜古勢	はまこせ?		
▲	久保	くぼ		
▲	かくれ淵	かくれぶち	水没前にあつた淵。別名蛇淵。川流しの山師がこの淵にツルを落とした。捨うために潜つたが、水底に角を突き合う二頭の雄牛のような岩があつた。おどろいて早々に岸に上がったという（『ふ』）。	
▲	尾小屋谷	おこやたに?	越野尾稲荷橋より約2km下流のところにある谷（『ふ』）。	
▲	瀬戸石	せといし	尾小屋谷の中ほどにある広い平のこと。ここに昔小春という児原神社の祖が住んでいたといわれている（『ふ』）。	未確認
▲	仁田水谷	にたみずだに	越野尾より約1.5km上流にある。バス停あり。その山の二合目ほどに置20枚もある大きな猪のヌタ場（ニタ）があつたという（『ふ』）。	
○	イケイト谷	いけいとだに		窪（くぼ）
○	ノヂ谷	のぢだに		
○	横之越	よこのこし	標高813. 33mの山頂。	出合内（であいのうち）
○	出合之内	でのうち		
○	越ノ尾	こしのお		越野尾（こしのお）
○	越野尾橋	こしのおばし		
○	一ツ瀬ダム	ひとつせだむ		
○	イタゴヤ谷	いたごやだに	一ツ瀬ダムへ落ちる谷	礫石（きれ）
○	礫石	きれ		
○	カナヤマ谷	かなやまだに		
○	長藪	ながやぶ	標高606.59mの山頂。	
○	銀見隧道	しろみずいどう		
○	上相見	かみそうみ		相見（そうみ）
○	白木谷	しろきだに		
○	イモフミ谷	いもふみだに		
○	相見谷	そうみだに		
○	仁田水橋	にたみずばし		
○	ハコ谷	はこだに		
○	児原神社	こばるじんじゃ	五穀豊穡・漁業・商売繁盛の神様。参詣者が多い。	小春（こばる）
○	良米稲荷橋	めらいなりばし		
○	大小小屋	だいしょうごや?		
○	ゲナワ谷	げなわだに		
○	ソクウ谷	そくうだに		下鶴（しもつる）
○	下ツル谷	しもつるだに		
○	山口谷	やまぐちだに		
○	山ノ戸谷	やまのとだに		
○	越ノ尾小学校	こしのおしょうがっこう		
○	山口谷	やまぐちだに		
○	アカギ谷	あかぎだに		
○	前谷	まえだに		二ノ渡（にのと）
○	山ノ戸隧道	やまのとずいどう		
○	岡江	おかえ	標高448.85メートルの山頂。	
○	山ノ戸橋	やまのとばし		
○	山ノ戸谷	やまのとだに		

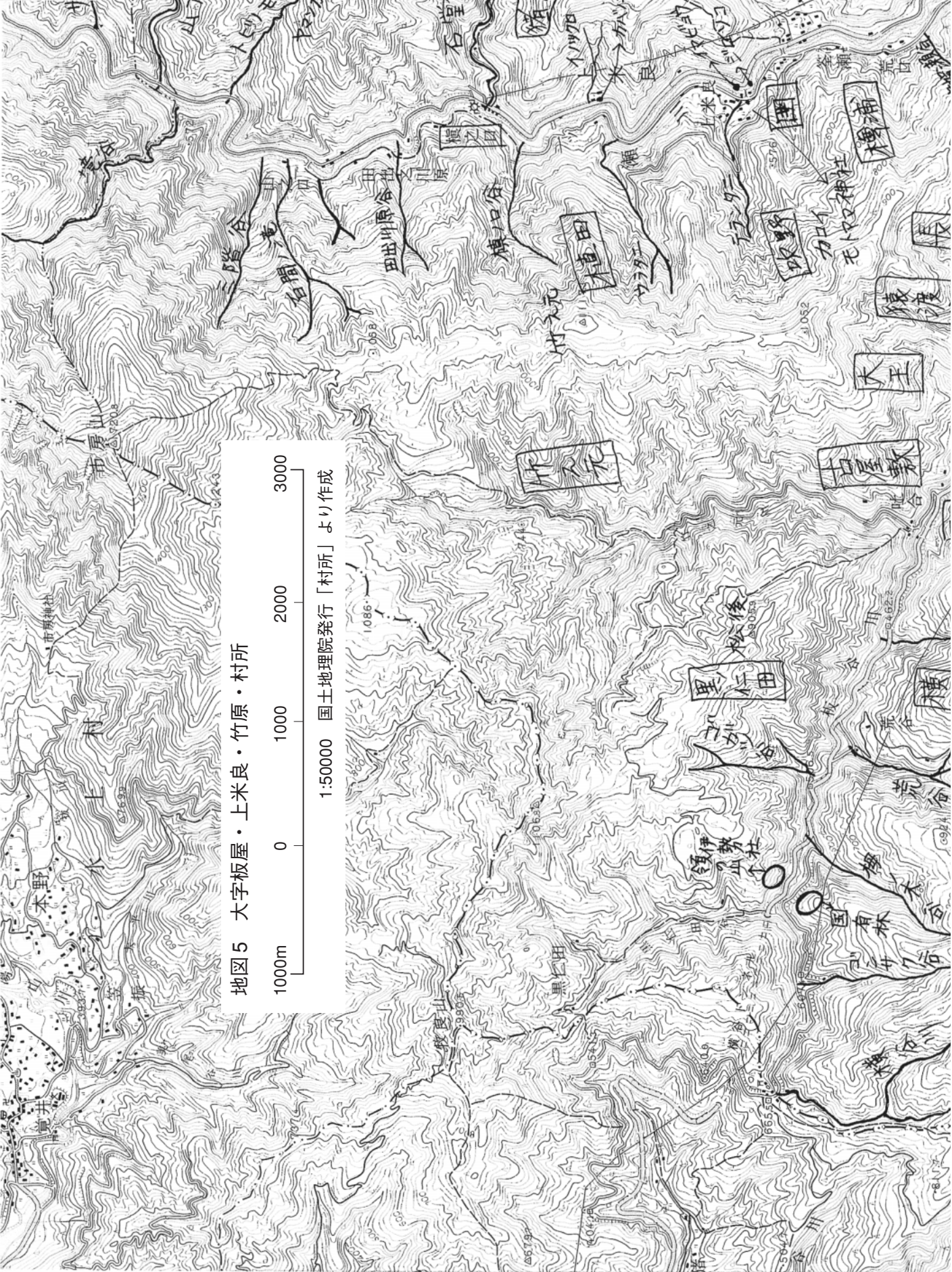


地図3 大字竹原中心地

0 250m 500m

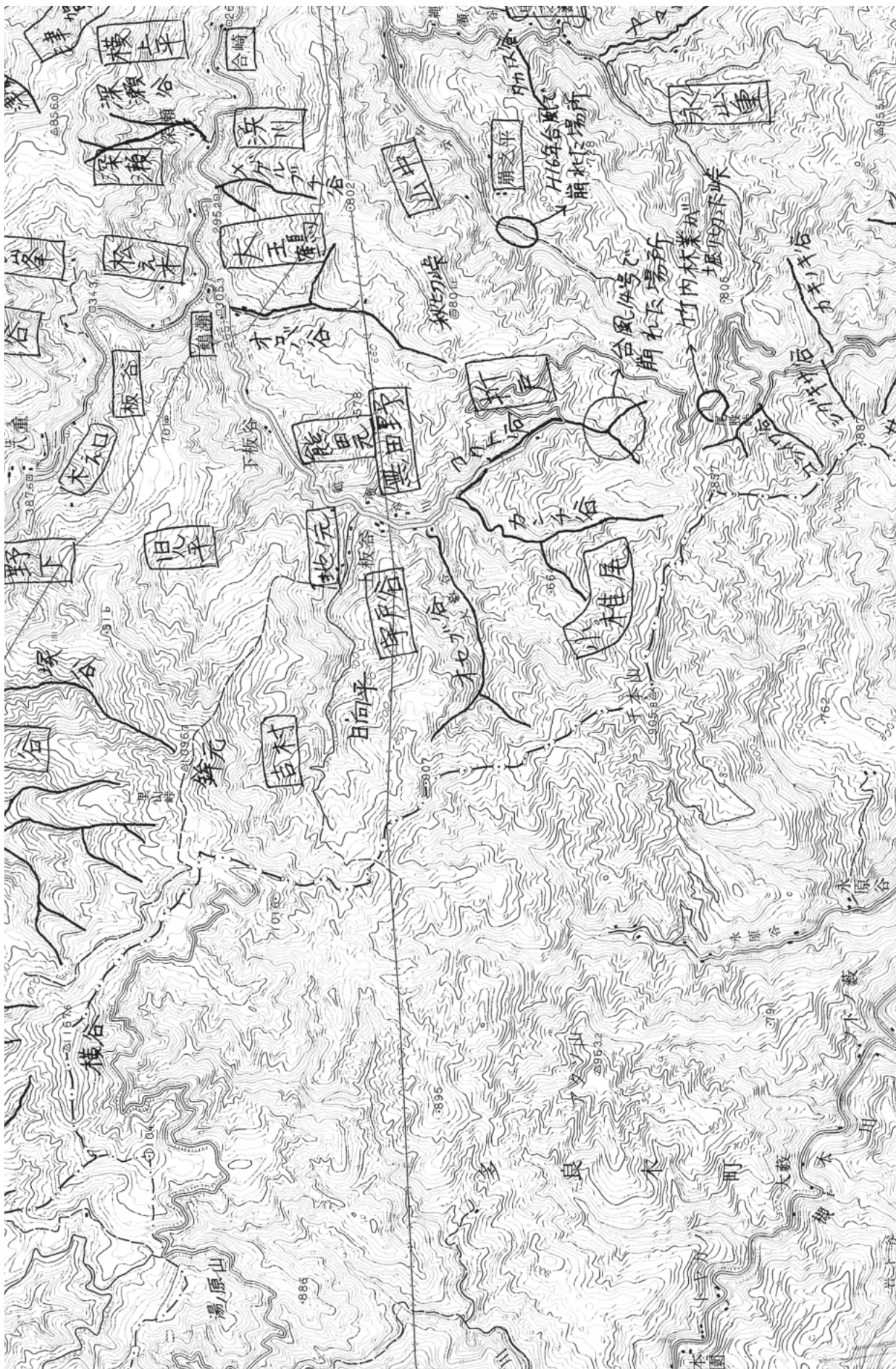
1:25000 国土地理院発行「村所」より作成



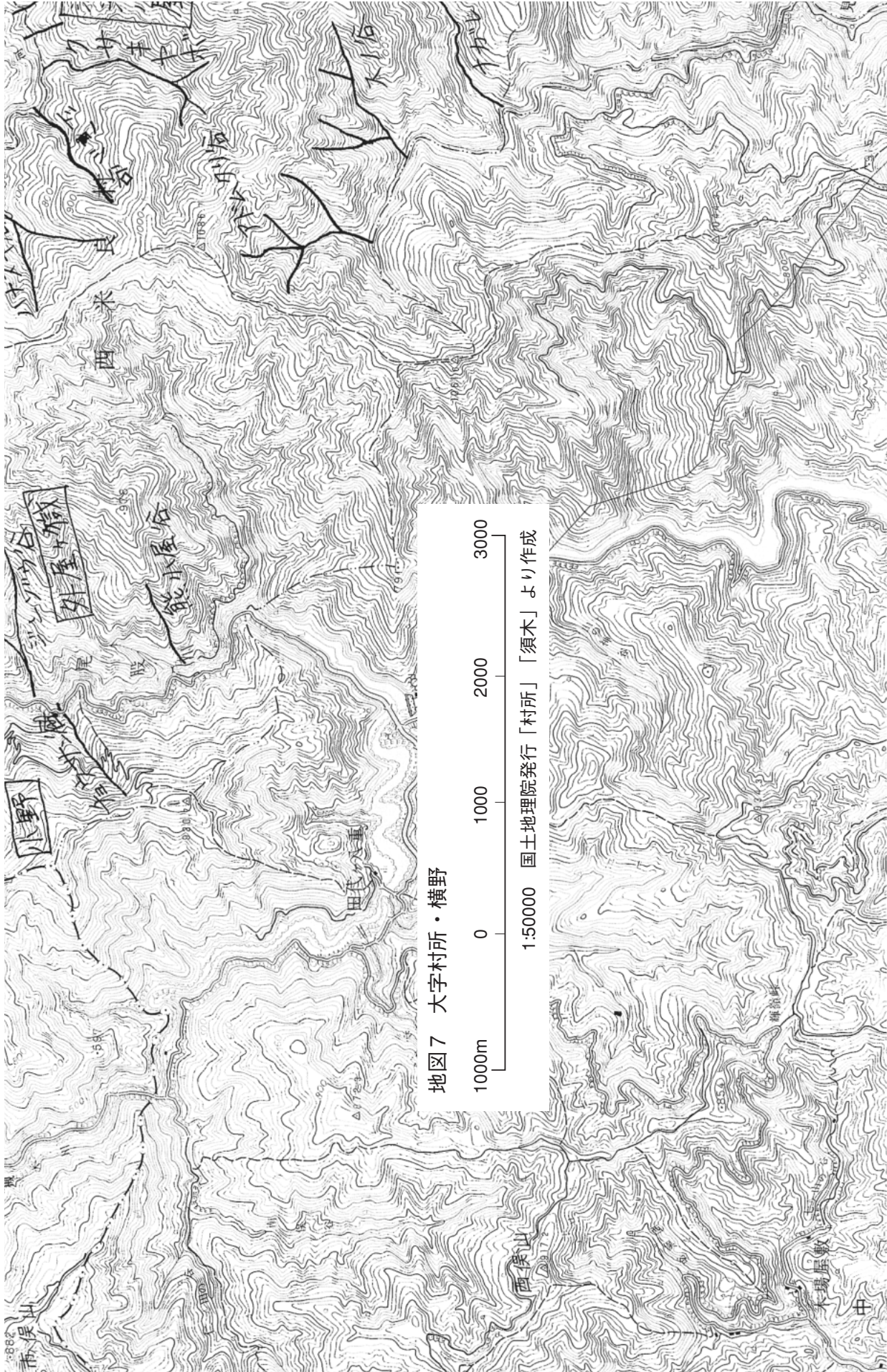


地図5 大字板屋・上米良・竹原・村所

1:50000 国土地理院発行「村所」より作成







おわりに

西米良村の調査は2006年7月、11月、翌年2月の3回おこなった。7月の調査ではちょうど宮崎に大型台風が直撃したときだった。村に一番近い電車や、国道が通行止めになった。目の前の一ツ瀬川はあっという間にクリーム色の濁流となった。ドウドウと落ちる雨音の下、山崩れの話を書くのはなかなかの迫力があった。1章の聞き取りに登場する村所地区の尾股山林や各地区の山中は道路の崩壊による通行止めのため、ほとんどの場所に行くことができなかった。

2章の通称地名の収集については、全村の地名としては乏しい限りの情報量である。『ふるさと探訪』にあるような故実や謂れのある地名は探しやすい。特にそういったものない地名とその場所についても押さえたが、まだその地名から生まれる風景のようなものを浮き上がらせるまでに至っていない。興味深い地名もいくつあったが、狩りのマブシに関する地名であるため、公開を控えた。真剣勝負で狩りをする人々の姿を

見ていると、地名が生々しいもの、生きる糧のキーワードなのだと本当に気づかされた。それはあえて書き残すべきものでもなく、わたしのような余所者に話すものでもない。自分の身内に語りかける、日々の生きた言葉なのだ、と。過去の地名となった時点で初めて公開できる、ということも痛感した。現状として、まずは記録の積み重ねに徹したいと思う。

(ほんだ・かな)

【謝辞】

調査中、以下の方々と機関に協力をいただいた。この場を借りて感謝を捧げる。

上米良安芳（昭和3年生） 浜砂廣 岡村春実（昭和14年生） 土居栄太郎（昭和9年生） 中武忠征 岩崎康道（昭和25年生） 岩崎八郎 岩崎義人 岩崎浩一 浜砂美奈子 田仲一成（昭和50年生） 西米良村歴史民俗資料館 九州電力西都支所（敬称略 順不同）。

【引用文献】

西米良村史編纂委員会編

1973 『西米良村史』 宮崎：西米良村役場

全国農業構造改善協会編

1989山村振興特別調査報告『峡谷・過疎山村における地域振興：宮崎県児湯郡西米良村』
西米良村教育委員会編

2001 『ふるさと探訪』 宮崎：印刷センタークロダ株式会社
竹内英夫・高倉又二・上野登共著

1965 『日向木炭経済史』 宮崎：宮崎印刷株式会社

【引用資料】

平成15年国土地理院発行20万分の1地形図「延岡」

平成7年国土地理院発行5万分の1地形図「尾鈴山」

平成6年国土地理院発行5万分の1地形図「村所」

平成15年国土地理院発行5万分の1地形図「須木」

昭和41年測図 宮崎県発行5千分の1西米良村森林基本図 1～28